

Title	大阪大学・京都大学 公共圏における科学技術 活動報告2015
Author(s)	公共圏における科学技術・教育研究拠点
Citation	大阪大学・京都大学 公共圏における科学技術 活動報告2015. 2016, p. 1-83
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89251
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

科学技術イノベーション政策における
「政策のための科学」基盤的研究・人材育成拠点

大阪大学・京都大学
公共圏における科学技術

活動報告
2015

目次

はじめに：なぜ、今、「公共のための科学技術政策」が必要なのか	1
• 公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）について	2
1. 教育プログラムの実施	5
• 大阪大学の取組	6
• 大阪大学 特色ある授業	11
• 京都大学の取組	13
• 京都大学 特色ある授業	17
• 合同講義	19
• 阪大学生の声	22
• 京大学生の声	24
2. プログラム推進委員会の運営	27
• 実施体制	28
• アドバイザー会議	29
• カリキュラムの発展及び拡充	29
• 研究会やイベント開催の企画及び調整	30
3. 拠点間共同プログラムへの参画	33
• サマーキャンプへの参画	34
• 共催：国際シンポジウム 2015	38
4. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施	41
• 阪大拠点主催：「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）	43
• 主催/共催：「シリーズ：適正技術」	45
• 共催：トークプログラム「知デリ」	50
• 共催：学術政策セミナー	53
• その他	54
• 市民参加型事例についての実態調査	55
5. 関西ネットワークの発展	57
• ラボカフェ	58
• 京大拠点主催：政策のための科学イベント	61
6. 国際連携の推進	63
• 国際連携	64
• 海外調査及び発表等	65
7. 政策のための科学に関連する活動（研究業績等）	67
• 大阪大学	68
• 京都大学	74

はじめに：なぜ、今、「公共のための科学技術政策」が必要なのか

「この論争は安全性に関するものではなく、どのような世界に生きていと欲するかという、はるかに大きな問題に関するものである。」(Select Committee on Science and Technology 2000)

この一文は、英国で1990年代末に過熱した遺伝子組換え作物(GM)論争の教訓として英国政府がまとめた報告書のものであります。

現代社会における科学技術政策は、社会の駆動力としての科学技術のあり方を形成する重要な政策となっています。一方で当然のことながらその政策は、科学技術の研究者集団のための振興策に尽きるものではありません。この点は、科学技術政策を「社会及び公共のための政策」の一つと位置づけた第4期科学技術基本計画(2011年)においても前提とされており、社会的課題に対応した科学技術政策の形成が必要とされています。つまり、これからの科学技術政策は「どのような世界に生きていと欲するか」という問いに答えるものでなければならないのです。

また科学技術政策を進めるにあたっては、「客観的証拠(エビデンス)」に基づいた「政策のための科学」が整備されるべきであることは言うまでもありません。しかしそれと同時に、そのような「政策のための科学」が、ともすれば客観的証拠を論文引用数や経済指標など「定量化可能なデータ」に限定した営みになることも私たちは懸念しています。

英国のGM論争の事例は、定量化可能なリスクに基づく安全性の説得という政策的対応が、問題の解決に至らなかったという反省を示しています。決定的に欠落していた視点は、世の中の人々が、科学技術や公共政策に何を期待し、何を懸念しているか、どのような世界に生きていと欲しているのか、といった社会の期待と懸念を把握することであり、これは統計的世論調査のような定量的方法だけで把握することは困難です。そのために必要なのは、研究者コミュニティや産業界、政策立

案者のみならず、一般の市民も含めた多様な人々や組織・集団が、直接・間接に議論し、熟慮を深め、自ら期待と懸念を顕在化し共有していく参加・関与・熟議のプロセスであると私たちは考えています。本拠点では、これを「科学技術への公共的関与(public engagement)」と呼んでいます。

大阪大学および京都大学の連携による本人材育成拠点で重点を置くのは、「科学技術の倫理的・法的・社会的問題(ELSI)」に関する研究を基盤として公共的関与の活動と分析を行い、学問諸分野間ならびに学問と政策・社会の間を“つなぐ”ことを通じて政策形成に寄与できる人材、言い換えるならば「科学技術への公共的関与」を促進する人材の育成です。

こうした公共的関与は、政策形成の初期の段階(アジェンダ形成段階)を含む各段階で、一般市民を含む多様なステークホルダーが参画・関与する公共的関与の活動と分析を行い、そこから社会的課題(期待や懸念、問題)を発見・特定し、政策や研究開発の立案・計画、テクノロジーアセスメントや社会的な合意形成等に反映させていく必要があります。そこで重要なのは、科学者・技術者の側が何を問題とし何をしたいかのみならず、社会の側が何を解決すべき問題と考え、科学技術に何を期待し、何を懸念しているかを把握することです。

そのためには、自分の専門分野の枠組みを超えて、広く俯瞰的・多角的に科学技術と社会の諸問題・課題を洞察・理解し、かつ公共的関与の活動と分析を行えるような知識とセンス、実践的な能力を備えた人材の育成が急務であると考えています。

STiPS 代表 小林傳司(大阪大学)

公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）について

「公共圏における科学技術・教育研究拠点（Program for Education and Research on Science and Technology in Public Sphere : STiPS）」は、大阪大学および京都大学の連携による人材育成プログラムです。文部科学省の科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」推進事業の一環として、2012年1月に発足しました。なお、同推進事業には5拠点が採択されており、有機的な拠点間連携を通じた人材の育成を目指しています。

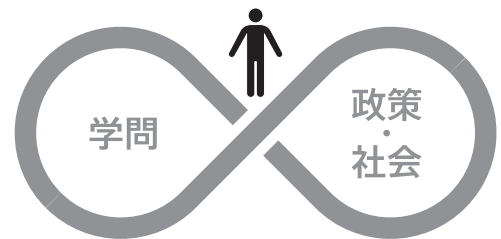
STiPSでは、科学技術の倫理的・法的・社会的問題（ELSI）に関する研究と教育を行い、政策形成に寄与できる「政策のための科学」の人材育成を進めています。



教育拠点としての STiPS

STiPSでは、科学技術や公共政策に対する社会の期待と懸念を把握するために、研究者コミュニティや産業界、政策立案者のみならず、一般の市民も含めた多様な人々や組織が、直接・間接に議論し、熟慮を深め、自ら期待と懸念を顕在化し共有していく参加・関与・熟議のプロセスが必要と考えています。

こうした「科学技術への公共的関与（public engagement）」に関する活動と教育を行うことにより、自分の専門分野の枠組みを超えて、多角的に科学技術と社会の諸問題を理解し、学問と政策・社会の間を“つなぐ”ことを通じて政策形成に寄与できる人材の育成を目指しています。



研究拠点としての STiPS

STiPSでは、政策形成における公共的関与の活動と分析をより効果的にするために、大阪大学と京都大学の連携により、幅広く科学技術の研究現場の動向を踏まえつつ、科学技術の倫理的・法的・社会的問題（ELSI）に関する研究を行います。また ELSI に関する研究を基盤として、テクノロジーアセスメントなどの公共的関与の活動と分析を行うことにより、公共的関与に関する理論的かつ実践的な能力を備えた人材育成を進めています。

実践拠点としての STiPS

STiPSでは、大学の知と社会の知をつなぐ「社会学連携」の実践と、そこに学生が主体的に関与することも含めた教育を実施します。大阪大学・京都大学は、関西圏の経済界や地域行政との関わりも密接であり、科学技術を通じた連携・交流が極めて盛んです。これに加えて、一般市民や NGO/NPO など市民社会の公共的関与活動への参画を促進することにより、地域社会のニーズや事情、課題をよりの確に反映した科学技術イノベーション政策や研究開発の立案・企画に貢献しています。



主要メンバー一覧（2016年3月現在）

大阪大学			
小林 傳司	大阪大学	理事・副学長	科学哲学、科学技術社会論
星野 俊也	大阪大学	理事・副学長	国際関係論、国連研究、米国外交、国際安全保障論
山中 浩司	大阪大学大学院人間科学研究科 人間科学専攻	教授	科学社会学、医療社会史、医療社会学、技術社会学
加藤 和人	大阪大学大学院医学系研究科 医学専攻	教授	生命倫理、医学倫理、科学コミュニケーション論
瀬戸山 晃一	大阪大学大学院法学研究科・高等司法研究科	招聘教授	法と医療・生命倫理、法理学、法哲学、行動心理学的「法と経済学」
平川 秀幸	大阪大学コミュニケーションデザイン・センター	教授	科学技術社会論
神里 達博	大阪大学コミュニケーションデザイン・センター	客員教授	科学史、科学技術社会論
八木 絵香	大阪大学コミュニケーションデザイン・センター	准教授	科学技術社会論、ヒューマンファクター研究
辻田 俊哉	大阪大学コミュニケーションデザイン・センター	講師	国際政治学、国際安全保障論
山内 保典	大阪大学全学教育推進機構	講師	認知心理学、科学技術社会論
渡邊 浩崇	大阪大学コミュニケーションデザイン・センター	特任講師	国際政治学、外交史、宇宙政策
工藤 充	大阪大学コミュニケーションデザイン・センター	特任助教	科学技術社会論、科学コミュニケーション論
京都大学			
川上 浩司	京都大学大学院医学研究科	教授	薬剤疫学、医療技術評価、レギュラトリーサイエンス
小山田 耕二	京都大学学術情報メディアセンター	教授	可視化
小寺 秀俊	京都大学大学院工学研究科	教授	マイクロTAS/MEMS
依田 高典	京都大学大学院経済学研究科	教授	応用経済学
カール・ベッカー	京都大学こころの未来研究センター	教授	倫理学、ターミナルケア、死生学
末松 千尋	京都大学経営管理大学院	教授	IT、事業創成
富田 直秀	京都大学大学院工学研究科	教授	医療工学、QOLデザイン
中山 建夫	京都大学大学院医学研究科	教授	健康情報学、疫学、ヘルスコミュニケーション
新山 陽子	京都大学大学院農学研究科	教授	農業経営学、食品安全、リスク認知
二木 史朗	京都大学化学研究所	教授	薬学、生体機能化学
高野 潔	京都大学学術情報メディアセンター	教授	情報通信政策
中澤 正彦	京都大学経済研究所	特定教授	金融政策と日本経済、財政政策
佐野 亘	京都大学大学院人間・環境学研究科	教授	政治理論、公共政策
後藤 励	京都大学白眉センター	准教授	医療経済学、医療政策
伊勢田 哲治	京都大学大学院文学研究科	准教授	科学哲学、倫理学
宮野 公樹	京都大学学際融合教育研究推進センター	准教授	大学論、学問論、政策哲学
久木元 伸如	京都大学学際融合教育研究推進センター	特定講師	ユーザインタラクション
堀 さやか	京都大学学際融合教育研究推進センター	特定助教	地球環境学、水ガバナンス

1. 教育プログラムの実施

1. 教育プログラムの実施

❖ 大阪大学の取組

大阪大学 大学院副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」・大学院等高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」概要

STiPS では、科学技術の倫理的・法的・社会的問題（ELSI）に関する研究と教育を行い、政策形成に寄与できる「政策のための科学」の人材育成を進めています。大阪大学コミュニケーションデザイン・センター（CSCD）では STiPS の教育プログラムとして、2013 年 4 月より「公共圏における科学技術政策」という大学院副専攻プログラムを提供しています。

大学院副専攻プログラム制度は、大阪大学が 2011 年度から始めたものです。これは、所属する研究科（主専攻）と異なる視点、学際的な視点、俯瞰的な視点といった複眼的視野の涵養のため、教育目標に沿って、主専攻に準ずるまとまりのある高度な専門的素養又は幅広い分野の素養を培うための大学院生に特化したプログラムです。プログラムに定める修了の要件を満たすことで、副専攻プログラム修了認定証が授与されます。副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」の修了には、必修科目 6 単位および選択科目 8 単位以上の計 14 単位以上の修得が必要です。

副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」は、「科学技術の倫理的・法的・社会的問題（ELSI）」に関する研究を基盤として公共的関与の活動と分析を行い、学問諸分野間ならびに学問と政策・社会の間を“つなぐ”ことを通じて政策形成に寄与できる人材、言い換えるならば「科学技術への公共的関与」を促進する人材の育成を目指しています。自分の専門分野の枠組みを超えて、広く俯瞰的・多角的に科学技術と社会の諸問題・課題を洞察・理解し、かつ公共的関与の活動と分析を行えるような知識とセンス、実践的な能力を学ぶためのプログラムを用意しています。

キャリアパスとしては、主専攻の専門性を中心としつつ、さらに「政策のための科学」の素養を備えた人材として、大学、研究機関、企業などに就職することが想定されます。また、地方及び国の行政、政策秘書、シンクタンク、研究大学の研究戦略（research policy）担当者、様々なセクターのリスクコミュニケーション人材としての活躍も期待されます。

本副専攻プログラムは、全国 5 拠点（政策研究大学院大学、東京大学、一橋大学、大阪大学・京都大学、九州大学）合同の合宿セミナーを始め、他の「政策のための科学」拠点と連携して進めています。拠点間ネットワークを生かし、公共的関与や政策形成の現場とのつながりを、より一層強化できるように努めています。

また、以上の副専攻プログラムに加えて、同じく 2013 年 4 月より大学院等高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」も提供しています。大学院等高度副プログラム制度は、大阪大学が 2008 年度から始めたものです。これは、大学院生および 6 年制課程の学部 5、6 年次を対象に、幅広い分野の知識と柔軟な思考能力を持つ人材など、社会において求められる人材の多様な要請に対応する取組として、教育目標に沿って、一定のまとまりを有する授業科目により構成され、体系的に履修することができるプログラムです。所定の単位を修得した学生には高度副プログラム修了認定証が授与されます。高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」プログラム修了には、必修科目 2 単位および選択科目 6 単位以上の計 8 単位以上の修得が必要です。

科学技術イノベーション

科学技術イノベーションを生み出し、社会に応用するプロセスで、何が起ころのでしょうか。そこで配慮すべきことについて、専門家と共に考えていきます。



公共的問題

科学技術は公共政策の観点からは、どのような役割を果たすのでしょうか。具体的な事例を題材に、それらを読み解く素養を修得していきます。



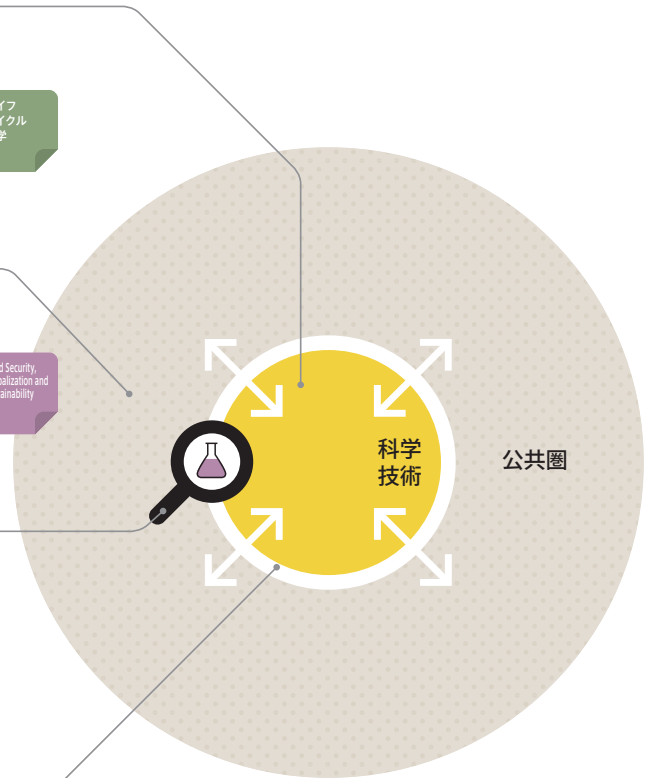
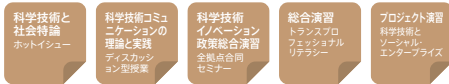
研究法

公共圏における科学技術のあり方を分析するためにどのような理論、概念、方法があるのでしょうか。それらを学び、自ら研究やイベントに取り組みます。



コミュニケーション

科学技術に関する公共的問題について、誰が何を主張しているのでしょうか。コミュニケーションの現場に身を置くと同時に、自身も議論に参加していきます。



大阪大学 大学院副専攻プログラム・大学院等高度副プログラムの運営状況

副専攻プログラム（修了要件 14 単位以上）

2015 年度

履修登録者数：6 名（所属研究科—文学：1 名、理学：3 名、工学：2 名）

*2015 年度の在籍者数の合計：23 名

修了者数：4 名（進路—内部進学：1 名、大学へ就職：1 名、民間企業：2 名）

*副専攻プログラムの修了証は、学生が副専攻の 14 単位を取得し、さらに主専攻を修了した後に授与されます。そのため、14 単位を取得したものの、主専攻を来年度以降に修了予定の学生数は含まれていません。

参考資料：過去の履修登録者数、修了者数

2013 年度

履修登録者数：15 名（所属研究科—文学：1 名、人間科学：1 名、法学：1 名、理学：5 名、薬学：1 名、工学：2 名、基礎工学：3 名、生命機能：1 名）

修了者数：2 名（進路—民間企業：2 名）

2014 年度

履修登録者数：11 名（所属研究科—人間科学：1 名、理学：1 名、医学系：1 名、工学：3 名、基礎工学：1 名、国際公共政策：1 名、生命機能：3 名）

修了者数：4 名（進路—政府・公的研究機関：2 名、民間企業：2 名）

高度副プログラム（修了要件 8 単位以上）

2015 年度

履修登録者数：6 名（所属研究科—文学：1 名、理学：1 名、医学系（医学）：1 名、工学：2 名、基礎工学 1 名）

*2015 年度の在籍者数の合計：22 名

修了者数：5 名（進路—不明：5 名）

*高度副プログラムの修了証は、学生が高度副の 8 単位を取得し、さらに主専攻を修了した後に授与されます。そのため、8 単位を取得したものの、主専攻を来年度以降に修了予定の学生数は含まれていません。

参考資料：過去の履修登録者数、修了者数

2013 年度

履修登録者数：8 名（所属研究科—人間科学：1 名、理学：2 名、医学系：3 名、国際公共政策：1 名、生命機能：1 名）

修了者数：0 名

2014 年度

履修登録者数：12 名（所属研究科—人間科学：1 名、理学：1 名、工学：4 名、基礎工学：3 名、国際公共政策：2 名、生命機能：1 名）

修了者数：3 名

大阪大学 副専攻プログラム（修了要件 14 単位以上） 開講科目一覧（2015 年度）

科目カテゴリー	開講部局（課程）	授 業 科 目 名	担当教員	単位	学期	
入門必修科目（2単位）	CSCD（院）	科学技術イノベーション政策概論 （2013年度新設科目）	神里達博ほか	2	1	
必修科目（2単位）	CSCD（院）	科学技術コミュニケーションの理論と実践	八木絵香ほか	2	1	
連携必修科目（2単位）	CSCD（院）	研究プロジェクト （2013年度新設科目）	小林傳司ほか	2	通年	
選択科目：8 単位以上（選択科目ⅠおよびⅡから、それぞれ 2 単位以上を履修）	選択科目Ⅰ： 基軸科目群	CSCD（院）	科学技術とコミュニケーション （2013年度科目名称変更）	平川秀幸ほか	2	1・2
		CSCD（院）	科学技術社会論基礎 （2013年度新設科目）	小林傳司ほか	2	1
		CSCD（院）	科学技術イノベーション政策総合演習 （2013年度新設科目）	小林傳司ほか	2	1
		人間科学研究科（博士前期）	フィールド調査法特講	森田敦郎、木村自、宮原暁	2	1
		人間科学研究科（博士前期）	社会における科学技術特定演習 （2013年度新設科目）	山中浩司、森田敦郎	2	2
		法学研究科（博士前期）	総合演習（トランスプロフェッショナルリテラシー）（2014年度追加科目）	福井康太、西本実苗	2	2
		工学研究科（博士前期）	サステナビリティ評価・技術論 （2014年度追加科目）	東海明宏ほか	2	1
		基礎工学研究科（博士前期）	科学技術移転論 （2014年度追加科目）	草部浩一	2	2
		国際公共政策研究科（博士前期）	公共政策Ⅰ	多胡圭一、星野俊也	2	2
	選択科目Ⅱ： インテグレーション科目群	CSCD（院）	科学技術と社会特論 （2013年度新設科目）	神里達博、平川秀幸	2	2
		法学研究科（博士前期）	総合演習（生命倫理と法）	瀬戸山晃一	2	2
		法学研究科（博士後期）	特定研究（生命倫理と法）	瀬戸山晃一	2	2
		医学系研究科（博士前期）	ライフサイエンスの倫理と公共政策 （2013年度新設科目）	加藤和人、吉澤 剛	2	1
		医学系研究科（博士前期）	産業環境マネジメント論	東海明宏	2	1
		工学研究科（博士前期）	ライフサイクル工学 （2014年度追加科目）	小林英樹、福重真一	2	1
		基礎工学研究科（博士前期） （ナノサイエンスデザイン教育研究センター提供）	ナノテクノロジー社会受容特論B	伊藤正	2	1
		国際公共政策研究科（博士前期）	環境法	松本充郎	2	1
		国際公共政策研究科（博士後期）	特殊研究（環境法）	松本充郎	2	1
		国際公共政策研究科（博士前期）	特殊講義（開発と環境）		2	不開講
		国際公共政策研究科（博士後期）	特殊研究（開発と環境）		2	不開講
		国際公共政策研究科（博士前期）	プロジェクト演習（科学技術とソーシャル・エンタープライズ） （2014年度追加科目）	星野俊也ほか	2	2
		国際公共政策研究科（博士前期）	特殊講義（人事の経済分析1）	松繁寿和	2	通年
		国際公共政策研究科（博士後期）	プロジェクト演習（人事の経済分析3）	松繁寿和	2	通年
		グローバルコラボレーションセンター（院）	グローバル健康環境 （2014年度追加科目）	本庄かおり、住村欣範	2	1
		グローバルコラボレーションセンター（院）	Food Security, Globalization and Sustainability （2014年度追加科目）	思沁夫、上須道徳	2	1
		全学教育推進機構（院）	ソーシャル・イノベーション：社会ニーズを世界で学ぶ （2014年度追加科目）		2	不開講

大阪大学 高度副プログラム（修了要件 8 単位以上） 開講科目一覧（2015 年度）

科目カテゴリー	開講部局（課程）	授 業 科 目 名	主担当教員	単位	学期
必修科目（2単位）	C S C D（院）	科学技術イノベーション政策概論 （2013年度新設科目）	神里達博ほか	2	1
選 択 科 目 ： 6 単 位 以 上	C S C D（院）	科学技術コミュニケーションの理論と実践	八木絵香ほか	2	1
	C S C D（院）	科学技術とコミュニケーション （2013年度科目名称変更）	平川秀幸ほか	2	1・2
	C S C D（院）	科学技術社会論基礎 （2013年度新設科目）	小林傳司ほか	2	1
	C S C D（院）	科学技術と社会特論	神里達博、平川秀幸	2	2
	人間科学研究科（博士前期）	フィールド調査法特講	森田敦郎、木村自、宮原暁	2	1
	人間科学研究科（博士前期）	社会における科学技術特定演習 （2013年度新設科目）	山中浩司、森田敦郎	2	2
	法学研究科（博士前期）	総合演習（トランスプロフェッショナルリテラシー） （2014年度追加科目）	福井康太、西本実苗	2	2
	法学研究科（博士前期）	総合演習（生命倫理と法）	瀬戸山晃一	2	2
	法学研究科（博士後期）	特定研究（生命倫理と法）	瀬戸山晃一	2	2
	医学系研究科（博士前期）	ライフサイエンスの倫理と公共政策 （2013年度新設科目）	加藤和人、吉澤 剛	2	1
	工学研究科（博士前期）	サステナビリティ評価・技術論 （2014年度追加科目）	東海明宏ほか	2	1
	工学研究科（博士前期）	産業環境マネジメント論	東海明宏	2	1
	工学研究科（博士前期）	ライフサイクル工学 （2014年度追加科目）	小林英樹、福重真一	2	1
	基礎工学研究科（博士前期） （ナノサイエンスデザイン教育研究センター提供）	ナノテクノロジー社会受容特論B	伊藤正	2	1
	基礎工学研究科（博士前期）	科学技術移転論 （2014年度追加科目）	草部浩一	2	2
	国際公共政策研究科（博士前期）	環境法	松本充郎	2	1
	国際公共政策研究科（博士後期）	特殊研究（環境法）	松本充郎	2	1
	国際公共政策研究科（博士前期）	公共政策 I	多胡圭一、星野俊也	2	2
	国際公共政策研究科（博士前期）	特殊講義（開発と環境）		2	不開講
	国際公共政策研究科（博士後期）	特殊研究（開発と環境）		2	不開講
	国際公共政策研究科（博士前期）	プロジェクト演習（科学技術とソーシャル・エンタープライズ） （2014年度追加科目）	星野俊也ほか	2	2
	国際公共政策研究科（博士前期）	特殊講義（人事の経済分析 1）	松繁寿和	2	通年
	国際公共政策研究科（博士後期）	プロジェクト演習（人事の経済分析 3）	松繁寿和	2	通年
	グローバルコラボレーションセンター（院）	グローバル健康環境 （2014年度追加科目）	本庄かおり、住村欣範	2	1
	グローバルコラボレーションセンター（院）	Food Security, Globalization and Sustainability （2014年度追加科目）	思沁夫、上須道徳	2	1
	全学教育推進機構（院）	ソーシャル・イノベーション：社会ニーズを世界で学ぶ （2014年度追加科目）		2	不開講

🍁 大阪大学 特色ある授業

「科学技術イノベーション政策概論」(1学期 水曜 5&6限、2単位)

本科目では、毎回、各界で活躍するフロントランナーをゲストとして招き、科学技術イノベーションが、社会にとってより良いものとして展開していくための諸条件について、講義とディスカッションを通じて立体的に学んでいます。これらにより、科学技術イノベーション政策を考える基礎としての政策過程の実際や、国内外の政策や実践の動向、またイノベーション論の関連分野についての基礎的知識、さらには社会の側のメッセージを科学技術の現場にいかにして伝えるかなど、イノベーションをめぐる広範な論点について、理解を深めています。

2015年度は、以下のような内容で行いました(ゲストの所属や肩書きは実施当時のもの)。なお、第8回と第9回は、連携拠点である京都大学の川上浩司教授、小山田耕二教授が講師でした。

第1回(2015年4月15日) 神里 達博(大阪大学 特任准教授)

ガイダンス

第2・3回(2015年4月22日) 鈴木 潤(政策研究大学院大学 教授)

科学技術イノベーション政策の根拠と評価

第4・5回(2015年5月13日) 岸本 充生(東京大学 特任教授)

レギュラトリーサイエンス論

第6・7回(2015年5月27日) 関根 千佳(同志社大学 教授)

ユニバーサルデザイン論

第8回(2015年6月10日) 川上 浩司(京都大学 教授)

医療産業イノベーション論

第9回(2015年6月10日) 小山田 耕二(京都大学 教授)

デザイン評価論

第10・11回(2015年6月24日) 宮田 由起夫(関西学院大学 教授)

産学連携論

第12・13回(2015年7月8日) 玄場 公規(法政大学 教授)

環境イノベーション論

第14・15回(2015年7月15日) 神里 達博(大阪大学 特任准教授)

まとめの議論

「科学技術と社会特論」(2 学期 水曜 5&6 限、2 単位)

本科目は、科学技術の進展や社会の状況と、受講生の関心・ニーズを踏まえ、毎年、具体的な科学技術の問題をテーマにした「ホットイシュー科目」です。現代社会における科学技術は、多大な恩恵をもたらすとともに、環境や人間の健康に対するリスクや倫理的問題などをめぐって、しばしば社会的な論争的になります。こうした科学技術をめぐる社会的対立の複雑なあり方を理解することは、科学技術イノベーション政策の立案や研究開発、社会の多様な立場をつなぐコミュニケーション実践を進めるうえで欠かせません。そのために本科目では、現在、社会的な論争が生じている科学技術の問題（ホットイシュー）を二つ取り上げ、それぞれについて「賛成派」「反対派」といった対立する立場の二人の論客を講師として招き、講義を受けたうえで、受講生および担当教員の間で討論を行っています。



そのために本科目では、現在、社会的な論争が生じている科学技術の問題（ホットイシュー）を二つ取り上げ、それぞれについて「賛成派」「反対派」といった対立する立場の二人の論客を講師として招き、講義を受けたうえで、受講生および担当教員の間で討論を行っています。

2015 年度は、原子力発電とデュアルユースを題材にしました。

第 1 回 (2015 年 10 月 7 日) 平川 秀幸 (大阪大学 教授)、神里 達博 (大阪大学 特任准教授)

ガイダンス

第 2 回 (2015 年 11 月 4 日) 大島 堅一 (立命館大学 教授)

原子力発電をめぐる諸問題

第 3 回 (2015 年 11 月 11 日) 諸葛 宗男 (東京大学 教授)

原子力問題の全体像

第 4 回 (2015 年 11 月 25 日) 平川 秀幸 (大阪大学 教授)、神里 達博 (大阪大学 客員教授)

振り返り (原子力発電)

第 5 回 (2015 年 12 月 9 日) 池内 了 (総合研究大学院大学 名誉教授)

科学の軍事利用について—デュアルユース論—

第 6 回 (2015 年 12 月 16 日) 角南 篤 (政策研究大学院大学 教授)

デュアルユースを巡る科学技術政策

第 7 回 (2016 年 1 月 6 日) 平川 秀幸 (大阪大学 教授)、神里 達博 (大阪大学 客員教授)

振り返り (デュアルユース)

第 8 回 (2016 年 1 月 20 日) 平川 秀幸 (大阪大学 教授)、神里 達博 (大阪大学 客員教授)

全体まとめ

京都大学の取組

京都大学 学際融合教育研究推進センター 「政策のための科学ユニット」 概要

「さまざまな分野を“つなぐ”人材」の育成

人類の持続的発展への願望を実現するために科学技術の発展に寄せられる社会の期待は、世界的規模で急速に高まっています。こうした社会の科学技術への期待の高まりは科学の知見の蓄積とそれを技術開発に結びつける創造力の結実が生み出した成果であるといっても過言ではありません。しかし一方で、このような科学技術の進歩が、グローバルな社会環境を生み出すとともに、人類の持続的発展に向けて我々が解決すべき課題を多様化・複雑化させています。このような社会的課題の解決には、研究者自身が解決すべき社会の課題を発見し解決するための研究を進め、その科学技術の成果を社会に実装し、社会システムの改革を含めて新しい社会的価値の創造をもたらすイノベーションを生起させることが必要です。

このような問題意識は我が国に限ったことではなく、現在世界各国がイノベーションによる経済社会の発展を目指して活発な取組を行っています。我が国がこのようなグローバルな世界で、持続的に発展していくためには、現代社会の解決すべき課題の多様性と複雑性に対応しつつ、資源や人材を有効に活用し国際競争力を高めていくことが不可欠です。

「政策のための科学」の扱うべき領域は、科学技術イノベーションに対する理解に加え、政策及びその形成過程、政策と自然・社会との相互作用といった、自然科学及び人文社会科学の諸科学分野に跨るものです。そしてまた、そこで得られた知見が実際の政策形成とその実施に寄与することが求められています。したがって、ここで育成される人材には、多様な学問分野の知見を総合し、社会的課題を的確に捉え、多様な利害関係者と協力しつつ政策形成・実施していくという合意形成の能力も求められます。

研究においては、政策を実施すべき各分野において、何を仮説として設定するのか、また、複数の異なる領域、価値観から、どのように優先順位をつけて予算配分をするのかといった問題が重要な課題です（図1）。

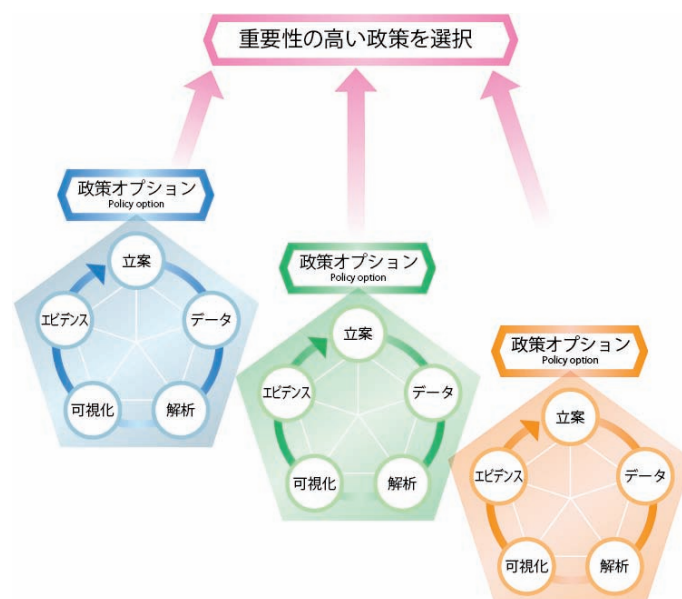


図1 さまざまな領域からの政策決定の概念図

定量的なエビデンスは、実世界における各種のデータを可視化し、そこから様々な手法で解析評価をする手法の深化が重要となります。実世界のデータからエビデンスへ、エビデンスから政策へ、そして政策を実施したのちにそれを評価していくというサイクルが形成されていくこととなります（図2）。

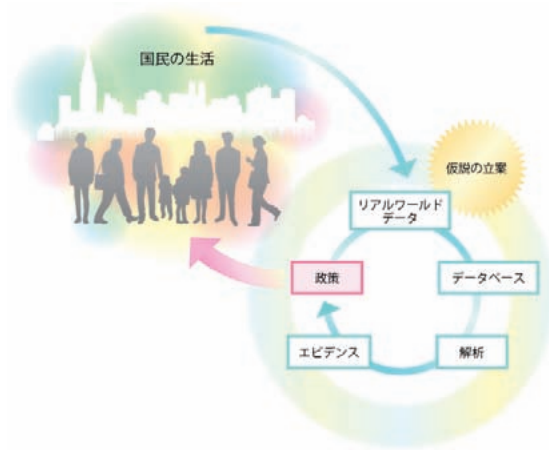


図2 エビデンスベースの政策決定の概念図

政策のための科学プログラムでは、大阪大学と京都大学の連携により、幅広く科学技術の研究現場の動向を踏まえつつ、科学技術の倫理的・法的・社会的問題（ELSI）に関する研究を基盤として、テクノロジーアセスメントなどの公共的関与の活動と分析を行うことにより、その分野と他分野・他業種・市民等をつなぐ人材育成を行います。育成された人材は、我が国の科学技術イノベーション政策の将来を担う人材として、多様なキャリアパスの中で、社会を先導できる人材となることが期待されています。修了後のキャリアパスとしては、各種研究職、行政職、政策秘書、シンクタンク職員、大学の研究戦略担当、リスクコミュニケーション人材などを想定しています。

京都大学 「政策のための科学ユニット」運営状況

研究科横断型教育プログラム（修了要件 14 単位以上）

2015 年度

履修者数：6 名（研究科内訳—人間・環境学研究科：1 名、医学研究科：1 名、農学研究科：1 名、
公共政策大学院：3 名）

* 2015 年度の在籍者数の合計：13 名

修了者 5 名（進路—大学：1 名、民間企業：2 名、博士課程進学：2 名）

* 研究科横断型教育プログラムの修了証は、学生が副専攻の 14 単位を取得すれば、主専攻の修了前でも授与されます。この点は大阪大学と京都大学で異なります。

参考資料：過去の履修登録者数、修了者数

2013 年度

履修者数：7 名（研究科内訳—医学研究科：3 名、経営管理大学院：1 名、工学研究科：1 名、農学研究科：1 名、人間・環境学研究科：1 名）

2014 年度

履修者数：7 名（研究科内訳—人間・環境学研究科：2 名、医学研究科：2 名、農学研究科：2 名、薬学研究科：1 名）

修了者：7 名（進路—政府・公的研究機関：2 名、民間企業：2 名、博士課程在学中：3 名）

京都大学 研究科横断型教育プログラム（修了要件 14 単位以上） 開講科目一覧（2015 年度）

区分	科目名	期間		主担当教員（研究科）	単位	
		前期	後期			
入門必修科目	現代社会と科学技術		○	川上浩司ら（医学研究科）	2	
連携必修科目	科学技術イノベーション政策特別演習	夏期集中		川上浩司ら（医学研究科）	2	
必修科目	研究プロジェクト	通年		川上浩司ら（医学研究科）	2	
選択科目（8 単位以上）	選択科目Ⅰ…基礎科目群（1 科目以上選択）	現代社会と科学技術入門	○		川上浩司ら（医学研究科）	1
		科学技術イノベーション政策総合演習	夏期集中		川上浩司ら（医学研究科）	2
		情報リテラシー基礎Ⅰ	○		小山田耕二（学術情報メディアセンター）	2
		医薬品政策・行政		○	川上浩司（医学研究科）	1
		問題解決思考		○	末松千尋（経営管理大学院）	2
		疫学Ⅰ（疫学入門）	○		中山建夫（医学研究科）	2
		公共政策論ⅠB		○	佐野亘（人間・環境学研究科）	2
		科学技術と社会に関わるクリティカルシンキング	○		伊勢田哲治（文学研究科）	2
	選択科目Ⅱ…イシニュー科目群（1 科目以上選択）	可視化シミュレーション学		○	小山田耕二（学術情報メディアセンター）	2
		医薬品の開発と評価		○	川上浩司（医学研究科）	1
		京都学のための科学	○		小山田耕二（学術情報メディアセンター）	2
		応用経済学		○	依田高典（経済学研究科）	2
		社会行動論演習2	○		カール・ベッカー（こころの未来研究センター）	2
		健康情報学		○	中山建夫（医学研究科）	2
		文献評価法	○		中山建夫（医学研究科）	1
		比較農業経営論	通年		新山陽子（農学研究科）	4
		食品安全学Ⅱ	○		新山陽子（農学研究科）	2
		技術倫理と技術経営	○		榎木哲夫ら（工学研究科）	2
		医療経済学A	○		後藤励（白眉センター）	2
共生社会環境論演習3B		○	佐野亘（人間・環境学研究科）	2		

🍁 京都大学 特色ある授業

「現代社会と科学技術入門」（前期 木曜 1 限、1 単位）、「現代社会と科学技術」（後期 木曜 3 限、2 単位）

本 2 科目は、様々な関連トピックを取り上げて、学内外からの講師による話題提供と、それに基づいた学生間のディスカッションを行い、科学の多様性と社会、政策を考えるための端緒としています。

2013 年度から 2015 年度にかけて、「現代社会と科学技術入門」では、医薬政策、大学における学問、科学的手法、防災と情報通信、リスクコミュニケーション、計量書誌学、疫学とゲノム科学、医療技術が起こす倫理問題、科学技術の社会への実装などをテーマとしました。「現代社会と科学技術」では、意思決定と不確実性、データの可視化、ライフサイエンス研究の倫理とガバナンス、政策としての生命倫理、大学の基礎研究と企業連携、宇宙政策、技術の質の評価、医療技術評価、食品のリスクアナライシスとレギュラトリーサイエンス、幹細胞とイノベーション、科学技術と社会、移植医療などをテーマとしました。

2014 年度からは、レポートには教員からのコメントを付けて学生にフィードバックしています。2013 年度はレポートを提出するのみでしたが、積極的な学生が多く自分のレポートに対するコメントを求めているので、各テーマを担当した教員がレポートに添えて学生にフィードバックするようにしました。

2015 年度の「現代社会と科学技術入門」と「現代社会と科学技術」は各回下記のテーマに従って話題提供と学生同士によるディスカッションを行いました。

「現代社会と科学技術入門」

第 1 回（2015 年 5 月 14 日） 川上 浩司（京都大学 教授）

「政策のための科学」 オリエンテーション

第 2 回（2015 年 5 月 22 日） 宮野 公樹（京都大学 准教授）

大学における学問とは？ 分野融合・越境のダイナミクス

第 3 回（2015 年 5 月 28 日） 小山田 耕二（京都大学 教授）

科学的方法について

第 4 回（2015 年 6 月 4 日） 中澤 正彦（京都大学 教授）

経済政策とデータ構築・利用

第 5 回（2015 年 6 月 11 日） 全教員

研究の進め方

第 6 回（2015 年 6 月 25 日） 中山 建夫（京都大学 教授）

疫学とゲノム科学から社会基盤を考える

第 7 回（2015 年 7 月 2 日） カール・ベッカー（京都大学 教授）

現代の医療技術が起こす倫理問題とその政策

第 8 回（2015 年 7 月 9 日） 宮野 公樹（京都大学 准教授）

振り返りワークショップ

第 9 回（2015 年 7 月 16 日） 大瀧 洋（京都市総合企画局総合政策室）

行政における政策決定のメカニズム～医療特区制度等を通じて～

第 10 回（2015 年 7 月 23 日） 全教員

研究の進捗確認

「現代社会と科学技術」

- 第1回 (2015年10月1日) 加藤 和人 (大阪大学 教授)
ライフサイエンス研究の倫理とガバナンス
- 第2回 (2015年10月8日) 平川 秀幸 (大阪大学 教授)
トランス・サイエンスと Participatory Technology Assessment
- 第3回 (2015年10月15日) 佐野 亘 (京都大学 教授)
現代民主主義のもとでの政策決定
- 第4回 (2015年10月22日) 小山田 耕二 (京都大学 教授)
データ可視化と政策立案
- 第5回 (2015年10月29日) 位田 隆一 (同志社大学 特別客員教授)
生命科学を「規制」する？—政策としての生命倫理
- 第6回 (2015年11月5日) 新山 陽子 (京都大学 教授)
食品のリスクアナライシスとレギュラトリーサイエンス
- 第7回 (2015年11月12日) ヤン・スタマン (オランダ・ラテナウ研究所 前所長)
オランダにおけるテクノロジー・アセスメントの実情
- 第8回 (2015年11月19日) 富田 直秀 (京都大学 教授)
技術の質の評価
- 第9回 (2015年11月26日) 齋藤 永 (京都大学 特定准教授)
社会的課題と情報通信技術の役割
- 第10回 (2015年12月3日) 依田 高典 (京都大学 教授)
「政策のための科学」の計量書誌学データ分析
- 第11回 (2015年12月10日) 後藤 励 (京都大学 准教授)
医療費の増加と医療技術評価
- 第12回 (2015年12月17日) 小寺 秀俊 (京都大学 教授)
大学の基礎研究と企業連携
- 第13回 (2015年12月24日) 末松 千尋 (京都大学 教授)
トランザクション・コストと経済政策
- 第14回 (2016年1月7日) 伊勢田 哲治 (京都大学 准教授)
クリティカルシンキングの観点からみた科学技術と社会
- 第15回 (2016年1月14日) 瓜生原 葉子 (同志社大学 准教授)
移植医療の社会的価値
- 第16回 (2016年1月21日) 宮野 公樹 (京都大学 准教授)
振り返りワークショップ

❖ 合同講義

「科学技術イノベーション政策総合演習（事前ワークショップ・サマーキャンプ）」（集中、2単位）

本科目は、拠点間共同プログラムであるサマーキャンプと、それに先立つ事前ワークショップから成り立っています。2015年度は、8月19日に事前ワークショップを大阪大学・京都大学合同で行った後、8月21日からのサマーキャンプに参加しました。8月21日から23日にかけてのサマーキャンプは、愛知県犬山市の名鉄犬山ホテルで開催され、大阪大学からは、学生7名と教員4名が、京都大学からは、学生5名と教員4名が参加しました。

事前ワークショップでは、サマーキャンプ当日に求められる、議論、ファシリテーション、問題発見・解決、発散的思考、収束的思考、プレゼンテーションなどの活動を、参加予定の学生が一通り体験できるようなプログラムを実施しました。午前中は、政策の下で生きる様々な人への配慮の基盤をつくることを目指し、中野優子さんと清水大地さんをお招きしたダンス・ワークショップを実施しました。午後は、問題への感性や想像力を発揮し、議論・思考・発表の実践的スキルを活用することを目指したデザインワークショップを実施しました。

サマーキャンプは、科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」基盤的研究・人材育成拠点（政策研究大学院大学、東京大学、一橋大学、大阪大学・京都大学、九州大学）の拠点間共同プログラムの一つです。このサマーキャンプでは、ゲスト講師による講義とともに、共同で問題分析や政策提言等を行うグループワークに取り組みました。



「研究プロジェクト」(通年、2単位)

本科目では、副専攻プログラムの総仕上げとして、公共的視点から科学技術と政策や社会とを「つなぐ」活動や成果物の作成を行うことにより、自らの専攻分野を生かしつつ、プログラムで学んだ知識やスキルを活用する能力を獲得します。具体的には、科学技術イノベーション政策に関連するトピックと方法論を用いて、「政策のための科学」に関連する個人研究もしくは共同研究のプロジェクトを実施し、学術研究論文あるいはそれに準ずるもの(日英可)を作成します。

授業では、そのための基礎文献の輪読や論文の書き方の指導をゼミ形式で行うとともに、進捗報告や発表の練習を行います。加えて、それぞれの研究テーマや進捗に合わせ、複数の担当教員による個別指導を行い、最後に、その論文の口頭発表会を実施しました。2015年度の合同発表会は、2016年2月13日に京都大学学友会館にて、大阪大学5名と京都大学5名の合計10名が発表を行いました。

学生論文・口頭発表の題名は以下のとおりです。

2015年度 (口頭発表会：2016年2月13日京都大学学友会館にて)

大阪大学

- (1) 技術者倫理教育の現状と展望—大阪大学・機械工学科目の「工学倫理」を題材として—
- (2) 科学技術政策における外部性とその内部化—科学技術社会論と古典的自由主義の融合—
- (3) 日本における核融合研究と政策—歴史、現状、そして今後に向けて—
- (4) 科学的証拠の証拠規則の整備に向けて—DNA型証拠と足利裁判—
- (5) 科学のあいまいさ・不確実性を伝える手法開発のための予備調査—大学生の科学に対する意識調査とワークショップ方式の有効性確認—

京都大学

- (1) 講義タイトルの表現方法に関する分析—大学教員が出張講義で高校生の興味を捉える—
- (2) 問題解決における現場地の重要性—自転車シェア事業を手掛かりに—
- (3) 診療報酬請求情報ナショナルデータベースの制度上の課題と展望—新規経口抗凝固薬薬剤疫学研究を事例に—
- (4) 食中毒リスクコミュニケーションにおける確率的数量情報の認知に関する研究
- (5) 栄養・健康分野における教育者の情報リテラシー・情報活用能力の涵養に向けた教育のあり方に関する検討

参考資料：研究プロジェクト 学生論文・口頭発表題名

2013年度 (口頭発表会：2014年2月19日大阪大学豊中キャンパスにて)

大阪大学

- (1) 日本の食品問題において消費者の不安感に影響を与える要素の考察
- (2) 多メディア時代の科学技術ジャーナリズム—「翻訳」、「批判」から「構築」へ—

2014年度（口頭発表会：2015年2月14日大阪大学中之島センターにて）

大阪大学

- (1) 「科学技術の智」プロジェクト・物質科学専門部会報告書の再編—エネルギーを中心として—
- (2) 科学技術とフィクション—人工子宮の現実化に寄せて—
- (3) 大学院博士後期課程への進学、その後の進路選択に関わる各種要因についての調査—先行研究を参考に学生側の視点を探る—
- (4) 環境ラベルに関する一考察—NLマークを事例にあげて—
- (5) 福島第一原子力発電所事故における「市民測定」—福島市の事例をもとに—
- (6) 中華人民共和国環境保護部による CNPC・Sinopet 石油精製プロジェクト差し止め事件—習近平政権における政府と国有石油企業の関係性の変化—
- (7) 科学のイメージと PR—企業広告において「科学的である」とはどういうことか—

京都大学

- (1) 外科領域における医療技術評価—社会の理解のために—
- (2) 医療ツーリズムにおける政策提言—医療ツーリスト受け入れ最前線への調査を通じて—
- (3) 可視化情報学会における会員満足度の因果関係分析
- (4) トップジャーナルからみた基礎医学研究の臨床—応用への実現に関する調査研究—
- (5) 京都府の高温耐性品種に対する消費者の価格評価の推定—選択型実験による接近—
- (6) 社会的・情緒的学習の導入によるインクルーシブ教育の実現
- (7) 虚血性心疾患に対する心臓リハビリテーション 実施状況の経年的変化—レセプトデータベースを用いた疫学的研究—



阪大・京大間の講師の相互派遣

実質的な教育における協力として、講師の相互派遣を積極的に行っています。大阪大学の入門必修科目「科学技術イノベーション政策概論」において、京都大学の川上浩司教授、小山田耕二教授が講師を務め、京都大学の入門必修科目「現代社会と科学技術」において、大阪大学の平川秀幸教授、加藤和人教授が講師を務めました。

🍷 阪大学生の声

STiPS は「知らないことを知る」場

南野 宏さん (理学研究科 化学専攻 修士課程1年)

STiPS のディスカッションの授業はとても楽しく、研究に打ち込む毎日の中で、よい気分転換になっていますね。レポートを書いたり、文献を調べたりするために、実験との時間の配分や作業効率に結構頭を使います。メリハリのついたタイムスケジュールになっているのではと、ポジティブに捉えながら工夫してやっています。

僕は STiPS の授業を、専門教育と同じような勉強や学問と捉えるというよりは、「知らないことを知る」場として捉えています。D1 くらいまでの間に、科学技術社会政策の複合領域の考え方や知識も身につけていく必要があると感じています。将来のことはまだあまりイメージが湧いていないのが正直なところなのですが、今は、せっかくの STiPS での経験を最大限活用して、ディスカッションを重ねながら考えを深めていけば、その先に何かあるのではないかと考えています。M1 の始めに受けたある授業で、基礎研究を続けることも社会貢献の一つであると学んだことが STiPS 受講のきっかけになりました。具体的にどのように社会還元をするべきなのかということも、これからも考えていきたいです。



濃い時間を一緒に過ごした特別な仲間ができた

本上 菜花さん (工学研究科 機械工学専攻 修士課程2年)

STiPS の関連で聴いたある起業家の方の講演がきっかけで、サイエンスコミュニケーターに興味を持ちました。今の社会に必要な仕事だと感じたのです。私は卒業後エンジニアとして就職することが決まっていますが、将来どこかでサイエンスコミュニケーターとしての役割を担えたらいいな、とも思っています。特に、科学をまだ科学とも捉えていないような小さな子どもたちに対して、何らかのかたちで科学を伝え、「科学は楽しい」と感じてもらえるようなことをやってみたいです。生涯そういう気持ちを持ち続けていきたいですね。

STiPS では、同期の存在に刺激を受けています。研究室の仲間と比べると圧倒的に短い時間しか一緒に過ごしていないのですが、サマーキャンプであるとか、ディスカッションであるとか、濃い時間を一緒に過ごしている特別な仲間ですね。私も将来どこかで一度立ち止まって、例えば何かを学びたいと思ったり、進む方向を考えたりということがあるかもしれません。STiPS で一緒に学んだ人達は、将来的に様々な道に進むと思いますので、私もしそういう風に考えるようになったら、相談したり、頼ったりすることもできるのではないかな、と思っています。



研究分野ごとにやり方がある。共通の作法があるわけではないと気付いた

吉田 剛さん (理学研究科 化学専攻 博士課程2年)

私は社会人経験を含めて、今まで、工学、理学の両方やってきました。どちらにも実験をしてデータを出してという共通の型のようなものがあり、扱うのは専ら量的データでした。一方、文学や法学、人間科学などでなされている研究には、全然違う型があります。そこで行われている「質的研究」がこんなに大変なものなのだと、STiPS で身に染みて分かりました。データを扱うのにこんなに気を配るのか、と気付いたのは非常に良い経験だったと思っています。研究分野ごとにやり方があり、共通の作法というものがあるわけではない。STiPS の理念でもある「つなぐ人材」を目指すためには、分野ごとの作法の違いを理解した上でコミュニケーションをとっていかないといけない、と考えるようになりました。

私はサマーキャンプで、リーダーをやらせていただきました。そこで感じたのは、「すごいな」「ちょっと真似できないな」という存在がいるということ。私はそういう人材の「宝」をコーディネートするスキルを見に付け、「つなぐ」ことができるようになりたい。今までの経験を生かしてそういうことができないかというのが、今考えていることです。



🌟 京大学生の声

皆で考え、話し合う意義や面白さがある

塩飽 瑛子さん（医学研究科 社会健康医学系専攻 専門職課程 1年）

私は主専攻で公衆衛生を学んでいます。公衆衛生といっても、疾病予防や健康増進、社会保障、環境・食品衛生など分野が多岐にわたっているので、広い視野が必要だと考えていました。そこで本プログラムの異分野融合、つなぐ人材、という言葉にとっても魅力を感じました。講義では、異分野の学生同士と一緒に講義を受け、議論の時間を通してお互いの意見や捉え方の違いが共有できます。政策を立案するには根拠が必要ですが、基準をどう定めるか、定量化して数字で表すことが本当に適切か、そしてそもそも科学とは何か、といった疑問が講義を受ける中で生まれ、自分の中の問いについて講義を受けながら多様な視点で考えることができます。答えは一つではないからこそ、皆で考え、話し合う意義や面白さがあると感じています。研究プロジェクトでは、ある化学物質を題材に、企業や行政等にインタビューを行い環境問題の意思決定プロセスに関する研究を行っています。研究テーマ決定の際から多くの先生方にご助言を頂け、進捗発表では先輩や友人の発表に刺激を受けて日々努力することができます。個性的な先生方と、様々な目的を持った学生の参加するととても刺激の多いプログラムです。



常に驚きと発見の連続です

小川 拓馬さん（公共政策大学院 修士課程 1年）

私は、政策の現場における研究成果の活用に対し、ぼんやりと疑問を抱いていました。世の中の研究成果は政策の現場では活かされていないのではないか。そんなことを考えていた折に、このプロジェクトが目にとまったのがきっかけでした。

STiPSは、自然科学や社会科学、人文科学、あるいはそのような分類に留まらない多様な領域の学生や研究者が、同じ問題について議論を交わす空間。「そんな見方があるのか！」「そういう考え方をするのか……」と常に驚きと発見の連続です。その中で私は、自分の考えの甘さを思い知りました。研究者間にもここまで「文化」の違いがあるのなら、研究者と政策現場の間にも根本的な「文化」の違いがあるのではないか。ならば、まずはそれを媒介する必要があるのではないか、と最近では考えるようになりました。

また同時に、自分が当然に受け入れている前提や概念も、コミュニティが違えば全く当たり前ではなくなるのではないか、と一歩引いた視点から物事を考える契機になりました。

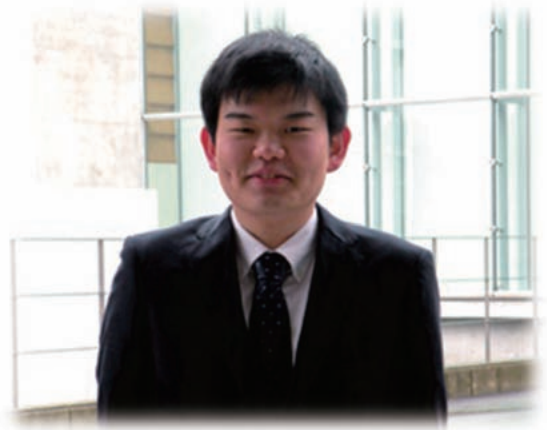
私は現在、政府に対する人々の信頼をテーマに研究プロジェクトに取り組もうと考えています。まだ手探りの段階ですが、行政と多様な市民との間をどのように媒介すべきかということに関わってくると思います。



“大学”へのインターンを経験して

福永 健人さん（公共政策大学院 修士課程1年）

「なぜ、普段大学で学ぶ大学院生がわざわざ大学へインターンするのか？」正直、自分でも一般企業や官公庁ではなく、大学それも他の大学へインターンすることの意義をはじめは分かっていませんでした。しかし、2週間の政策研究大学院大学でのインターンを通して、包括的に“政策のための科学”に携わるといふことの仕事観を身につけることができた実感することができました。具体的な調査手法を学ぶだけでなく、政策過程を議論するシンポジウム



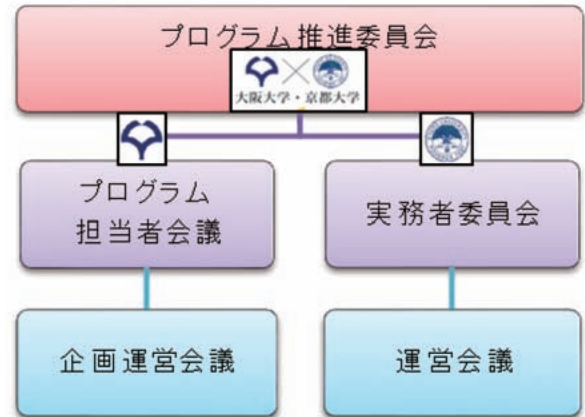
に出席したり、審議会を傍聴したりする中で、大学の研究者だけでなく、官僚やシンクタンクの人々など多様な政策アクターと関わる中での政策形成の実態を垣間見ることができたからです。単にそれぞれの独立したインターンシップに参加して、主観的な政策形成を体験するよりも、大学という一歩引いた立場だからこそ、外部から見た客観的な政策立案過程を間近で学ぶことができたのではないかと考えています。特に、まず課題があってそれを解決できる政策を考える学者とまずは政策を考えてその上で解決できる課題を考える実務家のそもそもの「政策」に対する根本的な概念の違いを教わったことが印象に残っています。今回、インターンを通して学んだことは、STiPSの論文執筆だけでなく、本専攻の公共政策を理解する上でも大きな経験になると思いますので、ぜひこれからの研究に活かせるように頑張りたいです。

2. プログラム推進委員会の運営

2. プログラム推進委員会の運営

❖ 実施体制

本拠点 STiPS では、教育研究プログラムを円滑かつ効率的に運営するためには、一大学内の部局間調整に加え、大阪大学と京都大学の両大学間において緊密な連携が不可欠です。これを実現するための実施体制は下記のとおりです（右図参照）。



阪大・京大会議（「プログラム推進委員会」）

2012年より、毎年4回、大阪大学と京都大学の参画教員で構成される「プログラム推進委員会」を実施してきました。2015年度は5月12日、6月10日、8月21日、2月13日の計4回実施しました。同会議では、両大学における調整に関する情報や教育研究プログラムの進捗状況を共有しています。加えて、合同講義の内容を含むカリキュラムの発展及び拡充、研究論文に関する指導調整、研究会やイベント開催の企画及び調整、サマーキャンプ、国際シンポジウム、出版事業などの拠点間合同事業に関する調整を行っています。

各大学における参画教員会議（阪大：「プログラム担当者会議」、京大：「実務者委員会」）

本教育研究プログラムを実施するためには、上述のプログラム推進委員会とは別途、各大学内の部局間調整が不可欠です。そのため、大阪大学と京都大学それぞれにおいて、構想調書時のメンバーやプログラムに新たに科目提供頂いた教員で構成されるプログラム参画教員の会議を開催しています。同会議では、プログラム進捗状況を参画教員で共有するとともに、プログラム履修者の確定や修了者の確定、カリキュラムの調整などを行っています。

各大学におけるワーキンググループ（阪大：「企画運営会議」、京大：「運営会議」）

大阪大学・京都大学合同で開催するプログラム推進委員会や各大学における参画教員会議の議題調整や細かな決定事項を遂行するために、大阪大学と京都大学では、それぞれワーキンググループを設けています。メンバーは、大阪大学では主にコミュニケーションデザイン・センターの教員、京都大学では主に「政策のための科学ユニット」教員です。合同拠点として開催するイベントの内容や報告・公開する文言の調整、プログラム推進委員会や参画教員会議の議題調整、他拠点との細かな連絡調整などを、同ワーキンググループが担い、迅速かつ効率的な運営と意思決定を実現しています。

🍁 アドバイザー会議

以上の実施体制に加えて、本拠点 STiPS は発足当初より、その教育研究プログラムの運営向上を目的として、有識者から構成される「アドバイザー会議（アドバイザー・ボード）」を設置しています。アドバイザー・メンバーは下記の4名です。

- ・鈴木 寛 文部科学大臣補佐官、東京大学公共政策大学院教授・慶應義塾大学政策メディア研究科兼総合政策学部・教授
- ・古川 俊治 自民党参議院議員、医学博士、弁護士、慶應義塾大学・教授
- ・鷺田 清一 京都市立芸術大学理事長・学長
(アドバイザー会議設置当時は、大谷大学文学部・教授、前大阪大学総長)
- ・三木 孝 神戸市保健福祉局長

🍁 カリキュラムの発展及び拡充

カリキュラムの科目内容については、本教育プログラム開始以来、さらなる充実を目指して、新たな科目の開設や科目名称変更などを行ってきました。その際、特に心がけてきたことは、講師の相互派遣などを含む大阪大学と京都大学の授業の連携強化です。また、講義は基本的にディスカッションやグループワークを組み込んだものとし、ゲスト講師としては他大学・研究機関などの研究者、省庁や企業、NGOなどの実務者を幅広く招へいしました。対象とする科学技術分野も、生命・医学、原子力やエネルギー、ナノテクノロジー、環境、開発、都市工学、情報通信技術、宇宙などへと拡大してきました。

大阪大学では、本プログラム開始の2013年度の開講科目数は21、うち新設科目数は7でしたが、2014年度の開講科目数は30、うち新たに追加した科目数は9となりました。2015年度の開講科目数は29でした。京都大学では、本プログラム開始の2013年度の開講科目数は22、うち新設科目数は5でしたが、2014年度の開講科目数は1科目追加し23科目となりました。2015年度の開講科目数は23でした。

また、大阪大学副専攻プログラムと京都大学研究科横断型教育プログラム（ともに修了要件14単位以上）が定める修了要件を満たした学生には、2014年度より、プログラム責任者、大阪大学総長、京都大学総長連名の修了認定証を授与しました。これは、2013年3月27日に両大学の総長名で締結されました「科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」推進事業「公共圏における科学技術・教育研究拠点」教育プログラム実施に伴う大阪大学と京都大学との間における単位の相互認定に関する協定書および覚書」に基づいています。2013年度より、この協定に基づき、受入大学の指定する授業科目の履修及び単位の修得を学生が希望するときは、当該授業科目の履修及び単位の修得ができるようになっています。

🌟 研究会やイベント開催の企画及び調整

ここでは実施イベント一覧を示します。各イベントについては、「4. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施」と「5. 関西ネットワークの発展」を参照ください。

名称	日時	場所	主催等
ラボカフェ シリーズ：科学技術イノベーション			
【シリーズ：科学技術イノベーション 第14回】 メディアと科学技術～伝えるということ～	2015年 7月14日	アートエリア B1	主催：STiPS
【シリーズ：科学技術イノベーション 第15回】 疑似科学とイノベーションの間	2015年 7月24日	アートエリア B1	主催：STiPS
【シリーズ：科学技術イノベーション 第16回】 日本の科学者はどこへ行くのか？	2015年 12月10 日	アートエリア B1	主催：STiPS
「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）			
【第13回 STiPS Handai 研究会】 大学ランキングと科学計量学	2015年 7月29日	大阪大学ステ ューデント・ コモンズ	主催：STiPS（阪大）
【第14回 STiPS Handai 研究会】 Technology Assessment in the Netherlands	2015年 11月10 日	大阪大学テク ノアライアン ス棟	主催：STiPS（阪大）
【第15回 STiPS Handai 研究会】 Research and Innovation policy The Japanese Experiment	2016年 1月13日	大阪大学ステ ューデント・ コモンズ	主催：STiPS（阪大）
シリーズ「適正技術：Design for Life—地域が変わるものづくり」			
【シリーズ：適正技術 第10回】 ソーシャル・ビジネスで生きていく：どうせやるなら、 社会を変える仕事を	2015年 6月22日	大阪大学 OSIPP 2F 講 義シアター	主催：大阪大学 OSIPP 稲盛財団寄 附講座 共催：大阪大学グロ ーバルコラボレー ションセンター、 STiPS
【シリーズ：適正技術 第11回】 途上国開発とデジタルものづくり	2015年 7月9日	大阪大学ステ ューデント・ コモンズ	主催：大阪大学 OSIPP 稲盛財団寄 附講座、STiPS

【シリーズ：適正技術 第12回】 ものづくりとBOPビジネスアイデア創出	2015年 11月8日	大阪大学 CSCD オレンジショップ	主催：STiPS 共催：東洋大学国際 共生社会研究セン ター
【シリーズ：適正技術 第13回】 ふるさと納税で地域を元気にしたい	2016年 1月21日	大阪大学 豊中総合学館	主催：大阪大学 CSCD 共催：大阪大学グロ ーバルコラボレー ションセンター、 STiPS 後援：株式会社JTB 西日本
【シリーズ：適正技術 第14回】 Fieldwork & Design Session：地域の魅力発見・発 信フィールドワーク in Kutsukiaso	2016年 2月16日 －17日	滋賀県高島市 朽木麻生地区	主催：大阪大学 CSCD 共催：STiPS
トークプログラム「知デリ」			
【知デリ in 梅田 蔦屋書店】 シマシマリズム：秩序の裏側 でたらめのほん	2015年 10月3日	梅田 蔦屋書 店 4th ラウ ンジ	主催：大阪大学 CSCD 共催：STiPS 支援：JST（科学技 術振興機構）科学技 術コミュニケーション 推進事業「ネッ トワーク形成型」
【知デリ in 3331 Arts Chiyoda】 モノとコトバの『地』平	2015年 10月12 日	3331 Arts Chiyoda 1F コミュニティ ースペース	主催：大阪大学 CSCD 共催：STiPS 支援：JST（科学技 術振興機構）科学技 術コミュニケーション 推進事業「ネッ トワーク形成型」

【知德利】 まなざしの交差点～物理学者と詩人の邂逅	2016年 3月27日	アートエリア B1	主催：大阪大学 CSCD 共催：STiPS 支援：JST（科学技術振興機構）科学技術コミュニケーション推進事業「ネットワーク形成型」
学術政策セミナー —大学のこれからを考える—			
【第1回学術政策セミナー】 研究経営人材育成に向けて	2015年 7月10日	大阪大学テクノアライアンス棟	主催：大阪大学大型教育研究プロジェクト支援室 共催：STiPS
【第2回学術政策セミナー】 なんのために研究をするのか・社会・学術への貢献	2015年 11月5日	大阪大学テクノアライアンス棟	主催：大阪大学大型教育研究プロジェクト支援室 共催：STiPS
その他			
シンポジウム「ソーシャル・イノベーションが拓く未来」	2015年 10月18日	大阪大学 基礎工学国際棟 シグマホール	主催：大阪大学 OSIPP 稲盛財団寄附講座 共催：Stanford PACS 協力：大阪大学 GLOCOL、STiPS

3. 拠点間共同プログラムへの参画

3. 拠点間共同プログラムへの参画

🍁 サマーキャンプへの参画

サマーキャンプは、全拠点の教員や学生が一堂に参集し、各拠点での取り組みをお互いが理解し合うとともに、共通のテーマでの討論や成果の共有、異分野交流などを行い、ネットワークを構築することを目的としています。

2015年度のサマーキャンプは、東京大学を幹事校として、2015年8月21日から23日に、愛知県犬山市の名鉄犬山ホテルにおいて開催されました。大阪大学からは、学生7名および教員4名が参加、京都大学からは学生5名と教員4名が参加しました。

参考資料：過去のサマーキャンプの情報

2013年度

実施日：8月23日から25日（事前ワークショップは、8月21日）

会場：オークラフロンティアホテルつくば（茨城県つくば市）

主催拠点：政策研究大学院大学 科学技術イノベーション政策プログラム（GIST）

学生グループワークの設計：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

参加者数：大阪大学からは学生7名と教員3名、京都大学からは学生6名と教員5名

2014年度

実施日：8月31日から9月2日（事前ワークショップは、8月27日）

会場：淡路島夢舞台国際会議場（兵庫県淡路市）

主催拠点：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

参加者数：大阪大学からは学生7名と教員9名、京都大学からは学生9名と教員6名

2015 年度の体制

主催：東京大学 科学技術イノベーション政策の科学教育プログラム (STIG)
共催：政策研究大学院大学 科学技術イノベーション政策プログラム (GIST)
一橋大学 イノベーションマネジメント・政策プログラム (IMPP)
大阪大学・京都大学 公共圏における科学技術・教育研究拠点 (STiPS)
九州大学 科学技術イノベーション政策教育研究センター (CSTIPS)



2015 年度の実施内容

2 日目の午後から 3 日目にかけて、以下の 6 つのグループに分かれて、それぞれ独自の課題に取り組みました。

- A 班：航空分野における課題 (担当教員：鈴木 真二 (東京大学))
- B 班：国際宇宙ステーション (ISS) を利用した宇宙の産業化 (担当教員：渡邊 浩崇 (大阪大学))
- C 班：家庭向け定置用蓄電システムの産業化 (担当教員：青島 矢一 (一橋大学))
- D 班：「都市鉱山」実用化の可能性探索 (担当教員：小林 俊哉 (九州大学))
- E 班：医療イノベーション・エコシステムの形成と産業化 (担当教員：鈴木 寛 (東京大学))
- F 班：ICT 活用による健康・医療産業の育成 (担当教員：柴山 創太郎 (東京大学))

サマーキャンプのプログラム

	8月21日(金)	8月22日(土)	8月23日(日)
午前		<p><u>7:00-8:45</u> 各自朝食</p> <p><u>8:50-9:00</u> 学生向けガイダンス</p> <p><u>9:00-10:30</u> 基調講演1: 科学技術イノベーション政策 鈴木 寛 (東京大学)</p> <p>基調講演2: 市民・企業・大学・金融機関と連携した環境先進都市の取組み 石川 要一 (豊田市経営戦略室)</p> <p>基調講演3: 航空科学技術イノベーションと産業化 鈴木 真二 (東京大学)</p> <p><u>10:30-10:40</u> 休憩</p> <p><u>10:40-11:00</u> 講義: 第5期科学技術基本計画の概要 赤池 伸一 (文部科学省)</p> <p><u>11:00-11:20</u> 講義: 科学技術イノベーション政策、ガバナンス 城山 英明 (東京大学)</p> <p><u>11:20-11:40</u> 講義: 科学技術と社会 小林 傳司 (大阪大学)</p> <p><u>11:40-12:00</u> 講義: 企業のイノベーション戦略 青島 矢一 (一橋大学)</p>	<p><u>7:00-9:00</u> 各自朝食後、チェックアウト</p> <p><u>9:00-10:30</u> 【学生】発表準備 【教職員】拠点運営協議会(2)</p> <p><u>10:30-12:00</u> 最終発表会(8分×7グループ)</p>
	<p><u>11:45</u> JR名古屋駅集合 *昼食は各自持参もしくは済ませてから</p>		

	8月21日(金)	8月22日(土)	8月23日(日)
午後	<p><u>12:00-13:00</u> JR名古屋駅出発 バス移動 *2つの班に分かれて以後行動</p> <p><u>13:00-16:30</u> 見学先ルートA・ルートB</p> <p><u>16:30-17:30</u> ホテルまでバス移動、着後各自 チェックイン</p> <p><u>17:30-17:45</u> 開会式</p> <p><u>17:45-18:30</u> オリエンテーション、アイスブ レイク</p> <p><u>18:30-20:30</u> 懇親会、ポスター発表</p> <p><u>20:30-</u> 自由時間</p>	<p><u>12:00-13:00</u> 昼食</p> <p><u>13:00-15:00</u> 【学生】対象と方向性のブレー ンストーミングと絞込み 【教職員】拠点運営協議会(1)</p> <p><u>15:00-16:30</u> 【学生】教員からのアドバイス 聴取、エビデンス収集、資料作 成 【教職員】学生グループワーク 指導</p> <p><u>16:30-17:40</u> 中間発表(5分×7グループ)</p> <p><u>17:45-</u> 夕食後、自由時間</p>	<p><u>12:00-13:00</u> 昼食(審査)</p> <p><u>13:00-14:00</u> 閉会式(講評、表彰)</p> <p><u>14:00-</u> 解散 *ホテルからJR名古屋駅まで バスあり</p>

🍷 共催：国際シンポジウム 2015

科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」基盤的研究・人材育成拠点 国際シンポジウム「産学連携政策とイノベーション」（主催：九州大学、政策研究大学院大学、一橋大学、大阪大学、京都大学）が、2016年2月19日に開催され、主催校として参加しました。

本拠点からは、招聘教授として来日していた Alain-Marc Rieu（アラン・マルク リュー）氏が招待講演を行いました。

科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」基盤的研究・人材育成拠点 国際シンポジウム「産学連携政策とイノベーション」

- タイトル：産学連携政策とイノベーション
- 日時：2016年2月19日（金）10:00～17:20
- 場所：ヒルトン福岡シーホーク 1F・アルゴス
- 主催：九州大学、政策研究大学院大学、東京大学、一橋大学、大阪大学、京都大学
- 後援：日経ビジネススクール

イノベーションの創出を目的とする産学連携政策は、今日、多くの国において活発に展開されております。このシンポジウムは、国内外の第一線で活躍する研究者、政策担当者を招聘し、各国の客観的データに基づく分析結果を踏まえて、産学連携政策の現状と課題に関する認識を深めることを目的としています。（シンポジウムの告知文より）

当日の流れは以下の通りです。

10:00-10:10 開会挨拶

青木 玲子（九州大学 理事・副学長）

10:10-11:20 【講演 1】

Poh Kam Wong（シンガポール国立大学 教授）

「Measuring Researcher Motivations Using Stokes' Quadrants: An Exploratory Study of Academics in a Singaporean University」

11:20-12:10 【講演 2】

Robert J.W.Tijssen（ライデン大学 教授）

「World University Rankings and university-business R&D Connections」

13:30-14:20 【講演 3】

Alain-Marc Rieu（リヨン第3大学 名誉教授）

「Innovation: how and why – After neoliberalism」

14:20-15:00 【講演 4】

鈴木 真也（文部科学省科学技術・学術政策研究所第3調査研究グループ 研究員）

「Collaborative Research between Japanese Firms and Foreign Universities」

新村 和久（文部科学省科学技術・学術政策研究所 第3調査研究グループ 上席研究官）

「Complementary Relationship between Industry-Academia Joint Research Projects and In-House R&D Activities」

15:00-15:20 【講演 5】

長谷川 光一（九州大学 助教）

「Database Construction for Measuring Effects of Industry-University Cooperation Policy on Academic Research Performance」

15:40-17:10 【パネル討論】

司会：永田 晃也（九州大学 教授/CSTIPS センター長）

パネリスト：Poh Kam WONG、Robert J.W.Tijssen、Alain-Marc Rieu、城山 英明（東京大学 教授）、
小寺 秀俊（京都大学 教授）、高田 仁（九州大学 教授）

17:10-17:20 閉会の挨拶

永田 晃也（九州大学 教授/CSTIPS センター長）

4. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施

4. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施

本拠点 STiPS は、「科学技術の倫理的・法的・社会的問題（ELSI）に関する研究を基盤として公共的関与の活動と分析を行い、学問諸分野間ならびに学問と政策・社会の間をつなぐことを通じて政策形成に寄与できる人材」の育成を目的としています。こうした人材育成プログラムの目的を達成すべく、本拠点の参画教員が中心となり、ELSI や公共的関与に関する研究成果を学術論文や学会報告などを通じて多数発表してきました。2015 年度の参画教員別の研究業績の詳細については、「7. 政策のための科学に関連する活動」を参照ください。

また、公共的関与に関わる基盤的研究の発展に向け、海外の大学機関との積極的な連携による研究を試みると同時に、そうした連携を視野に入れた海外調査及び発表等を行ってきました。2015 年度の国際連携の推進に関わる活動については、「6. 国際連携の推進」を参照ください。また、ELSI や公共的関与に関する研究の実践的展開を図り、その成果を検証しつつさらなる研究に結びつけるために、多様な参加型イベントを昨年度に引き続き実施しました。学術政策セミナー、シリーズ「適正技術」、「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）につきましては本章を、ラボカフェ、政策のための科学イベントにつきましては、「5. 関西ネットワークの発展」を参照ください。

❖ 阪大拠点主催：「公共圏における科学技術政策」に関する研究会 (STiPS Handai 研究会)

学際的教育が有効に機能するために、授業を担当する教員が、他の教員の教えている内容を知ることが有益です。しかし実際には、学生は様々な参画教員の授業を受け、異なる領域の知見に触れることができますが、参画教員同士がそうした経験をする場は限られています。この STiPS Handai 研究会は、学内外の研究者を招き、学生だけでなく教員が相互に学び合うことを目的とした、少人数の議論を中心とした研究会です。これをきっかけに学内を中心に協力教員の輪を拡充するとともに、相互理解を深めていくことが期待されます。2015 年度は 3 回実施しました。

第 13 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：大学ランキングと科学計量学
- ゲスト：調 麻佐志（東京工業大学大学院理工学研究科 准教授）
- 日時：2015 年 7 月 29 日（水）16:20～17:50
- 場所：大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構スチューデント・コモンズ 2 階 セミナー室 2
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点 (STiPS)

2015 年 7 月 29 日（水）に、大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構スチューデント・コモンズ 2 階 セミナー室 2 にて、第 13 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会 (STiPS Handai 研究会) を開催しました。

今回は、東京工業大学大学院理工学研究科 准教授の調麻佐志氏をお招きし、「大学ランキングと科学計量学」というタイトルでご講演頂きました。

第 13 回 STiPS Handai 研究会

大学ランキングと 科学計量学

調 麻佐志
東京工業大学大学院理工学研究科 准教授

2015 年 7 月 29 日 (水) 16:20～17:50

大阪大学 豊中キャンパス
全学教育推進機構スチューデントコモンズ2階 セミナー室2

お問い合わせ先: stips_staff@ccod.osaka-u.ac.jp

STiPS 公共圏における
科学技術・教育研究拠点 (STiPS)
http://stips.osaka-u.ac.jp

CSE2

第14回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：Technology assessment in the Netherlands
- ゲスト：Jan Staman (ヤン スタマン) (オランダ・ラテナウ研究所 前所長)
- 日時：2015年11月10日(火) 16:20~17:50
- 場所：大阪大学吹田キャンパス テクノアライアンス棟 1階 交流サロン
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点 (STiPS)

2015年11月10日(火)に、大阪大学吹田キャンパス テクノアライアンス棟1階 交流サロンにて、第14回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会 (STiPS Handai 研究会) を開催しました。

今回は、オランダ・ラテナウ研究所 前所長の Jan Staman (ヤン スタマン) 氏に、「Technology assessment in the Netherlands」というタイトルでご講演頂きました。

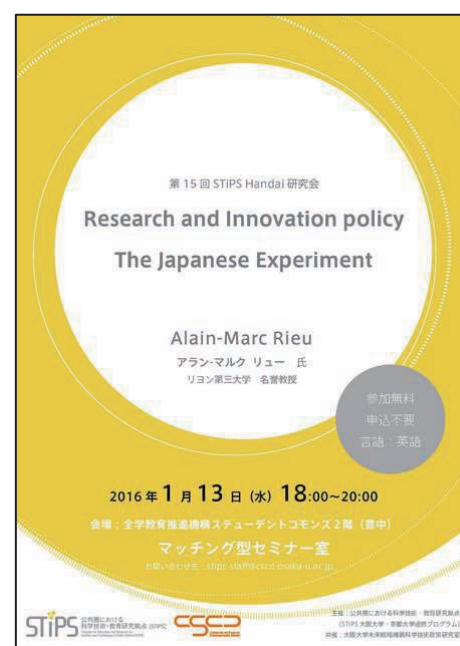


第15回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：Research and Innovation Policy: The Japanese Experiment
- ゲスト：Alain-Marc Rieu (アラン=マルク・リュウ) (リヨン第三大学 名誉教授)
- 日時：2016年1月13日(水) 18:00~20:00
- 場所：大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構スチューデント・コモنز 2階 マッチング型セミナー室
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点 (STiPS)

2016年1月13日(水)に、大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構スチューデント・コモنز2階 マッチング型セミナー室にて、第15回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会 (STiPS Handai 研究会) を開催しました。

今回は、リヨン第三大学 名誉教授の Alain-Marc Rieu (アラン=マルク・リュウ) 氏に、「Research and Innovation Policy: The Japanese Experiment」というタイトルでご講演頂きました。



🌟 主催/共催：「シリーズ：適正技術」

複雑化・多層化する現地の地域課題解決のための適正技術創出のためには、ものづくりの専門性のみならず、サステナビリティ、開発援助、ビジネスなど、様々な分野との「知の融合」が必要となります。学際的かつ実践的な課題解決型の取組みは、その社会貢献の可能性に加え、大学教育においては、学生の課題発見・解決能力向上やものづくりに伴うデザイン力の向上などの様々な教育効果が期待されることから、2000年代以降において、欧米主要大学において、適正技術を題材にした教育プログラムが普及しました。一方で、国内では、体系的な適正技術に関する教育システムは確立されていません。しかし、社会課題の解決に向けた適正技術創出の必要性は、開発途上国のみではなく、超高齢化社会や地方過疎化といった「課題先進国」である日本が抱える課題解決のためにも不可欠であると考えられます。

こうした問題意識のもと、2013年度より開催している「シリーズ：適正技術」ワークショップ「Design for Life—地域が変わるものづくり」では、国内外での社会貢献、ものづくり、ビジネスなどの領域をつなぐ「適正技術」のあり方について、ワークショップや実践を通じて考えています。2015年度は、5回のイベントを開催し、合計で200人程度が参加しました。

「シリーズ：適正技術」第10回ワークショップ開催

- タイトル：ソーシャル・ビジネスで生きていく：どうせやるなら、社会を変える仕事を
- ゲスト講師：鈴木 雅剛（ボーダレス・ジャパン 代表取締役副会長）
- 日時：2015年6月22日（月）17:30～19:00
- 場所：大阪大学豊中キャンパス 国際公共政策研究科 2F 講義シアター
- 主催：大阪大学大学院国際公共政策研究科（OSIPP）稲盛財団寄附講座
- 共催：大阪大学グローバルコラボレーションセンター、公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

近年、社会問題の解決を主眼とした「ソーシャル・ビジネス」が注目を集めていますが、まだまだ世の中に大きく広がっていません。どうすればソーシャル・ビジネスを成功させられるのか、本質的な理解と実践力が問われています。

この回は、国境を超えてソーシャル・ビジネスを展開しているボーダレス・ジャパンの鈴木氏をお招きしました。ソーシャル・ビジネスの本質とはなにか、ボーダレス・ジャパンの創業経緯と現在の事業内容・今後の展開、そして社会貢献をキャリアにすることについて、ご講演いただきました。

主催：大阪大学大学院国際公共政策研究科（OSIPP）稲盛財団寄附講座
共催：国際公共政策研究科 2F 講義シアター、公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

FIELDOSカーナビ-イベント連続講座(26)
【シリーズ：適正技術 Design for Life】第10回 WS
ソーシャル・ビジネスで生きていく
どうせやるなら、社会を変える仕事を

講師：鈴木雅剛氏
（ボーダレス・ジャパン代表取締役副会長）

日時：2015年6月22日（月）17:30-19:00
場所：大阪大学豊中キャンパス
国際公共政策研究科2F 講義シアター

近年、社会問題の解決を主眼とした「ソーシャル・ビジネス」が注目を集めていますが、まだまだ世の中に大きく広がっていません。どうすればソーシャル・ビジネスを成功させられるのか、本質的な理解と実践力が問われています。

本シリーズでは、国境を超えてソーシャル・ビジネスを展開しているボーダレス・ジャパンの鈴木氏をお招き、ソーシャル・ビジネスの本質とはなにか、ボーダレス・ジャパンの創業経緯と現在の事業内容、今後の展開、そして社会貢献をキャリアにすることについて、講演いただきます。

参加：無料、要事前申込
申込みは6/22日17:00～18:00まで、J1ある館2F待合室を以て、
申し込みは無料です。
当日参加も可能です。

講師経歴：鈴木雅剛（すずき まさよし）氏
ボーダレス・ジャパン代表取締役副会長
2002年、17歳で、代表取締役会長の祖父と共に株式会社ボーダレス・ジャパンを創業。創業当初は日本国内で、主にソーシャル・ビジネスとして活動。その後、海外展開を推進し、現在は、世界を舞台に社会貢献を推進する社会貢献型企業として活動中。ソーシャル・ビジネスが社会問題の解決にどう貢献できるのかを、本シリーズで提示している。

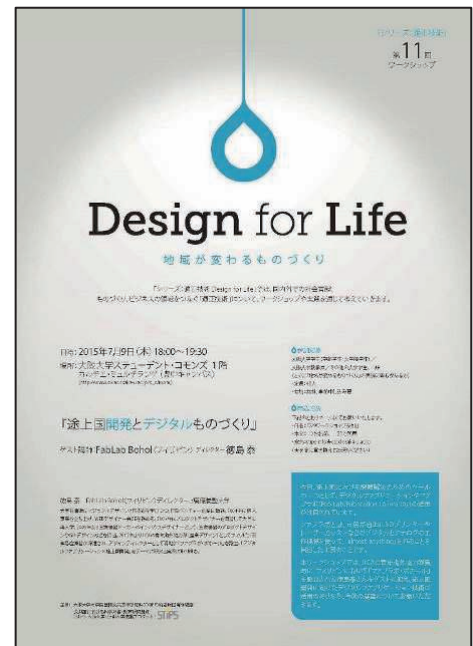
お問い合わせ先：
大阪大学グローバルコラボレーションセンター
info@global.osaka-u.ac.jp
http://www.global.osaka-u.ac.jp/

「シリーズ：適正技術」第11回ワークショップ開催

- タイトル：途上国開発とデジタルものづくり
- ゲスト講師：徳島 泰（FabLab Bohol（フィリピン）ディレクター）
- 日時：2015年7月9日（木）18:00～19:30
- 場所：大阪大学ステューデント・commons 1階 カルチエ・ミュルチラング（豊中キャンパス）
- 主催：大阪大学大学院国際公共政策研究科（OSIPP）稲盛財団寄附講座、公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

今日、途上国における課題解決のためのツールの一つとして、デジタルファブリケーションやファブラボ（Fab Lab：Fabrication Laboratory）の活用が注目されています。ファブラボとは、市民が自由に3Dプリンターやレーザーカッターなどのデジタルとアナログの工作機械を使って、「almost anything」を作ることを目指した工房のことです。

本ワークショップでは、JICAの青年海外協力隊員時に、フィリピンにおいて「ファブラボ・ボホール」を設立された徳島泰さんをゲストに迎え、途上国開発に向けたデジタルファブリケーション技術の活用のあり方や、今後の展望についてお話をいただきました。

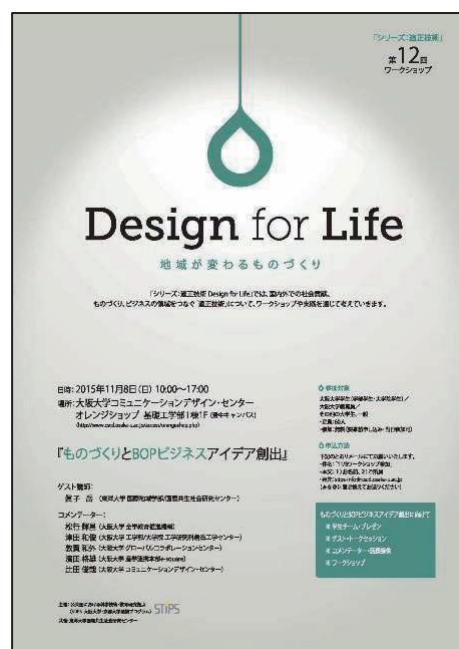


「シリーズ：適正技術」第12回ワークショップ開催

- タイトル：BOP ビジネスのアイデア創出
- ゲスト講師：眞子 岳（東洋大学国際地域学部/国際共生社会研究センター）
- コメンテーター：松行 輝昌（大阪大学全学教育推進機構）、津田 和俊 氏（大阪大学工学部/大学院工学研究科創造工学センター）、敦賀 和外（大阪大学グローバルコラボレーションセンター）、濱田 格雄（大阪大学産学連携本 e-square）、辻田 俊哉（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター）
- 日時：2015年11月8日（日）10:00～17:00
- 場所：大阪大学 コミュニケーションデザイン・センター オレンジショップ 基礎工学部 I 棟 1F（豊中キャンパス）
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：東洋大学国際共生社会研究センター

「シリーズ：適正技術 Design for Life」では、国内外での社会貢献、ものづくり、ビジネスの領域をつなぐ「適正技術」について、ワークショップや実践を通じて考えていきます。

本ワークショップでは、東洋大学の眞子岳氏をゲスト講師に迎え、「BOP ビジネスのアイデア創出」というタイトルでお話をいただきました。その後、学生が考えたアイディアのプレゼンテーションが行われ、大阪大学教員 5 名がそれらのアイディアに対してコメントしました。



「シリーズ：適正技術」第13回ワークショップ開催

- タイトル：「ふるさと納税で地域を元気にしたい」
- ゲスト講師：須永 珠代（株式会社トラストバンク 代表取締役社長）
- 日時：2016年1月21日（木）18:00～20:00
- 場所：豊中総合学館 501 講義室（大阪大学豊中キャンパス）
- 主催：大阪大学コミュニケーションデザイン・センター（CSCD）
- 共催：大阪大学グローバルコラボレーションセンター、公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 後援：株式会社 JTB 西日本

「生まれ育ったふるさとに貢献したい」、「自分の意思で応援したい自治体を選びたい」といった思いを叶えるために2008年に創設された「ふるさと納税」。今、特産品などの特典も人気となって自治体への寄附が飛躍的に伸びています。

本セミナーでは、ふるさと納税のポータルサイト「ふるさとチョイス」を立ち上げ、ふるさと納税ブームを巻き起こした株式会社トラストバンク社長の須永氏をお招きし、起業のきっかけ、地方創生への思い、そして今後の展望や課題について語っていただきました。



主催 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター
共催 大阪大学グローバルコラボレーションセンター
協賛 株式会社 JTB 西日本

GLCQCLセミナー(138)
「シリーズ：適正技術 Design for Life」第13回 WS

ふるさと納税で 地域を元気に したい

地域活性化の仕掛けとこれから

講師：須永珠代氏
(株式会社トラストバンク 代表取締役社長)

日時：2016年1月21日（木）18:00-20:00
場所：大阪大学豊中キャンパス
豊中総合学館501講義室

「生まれ育ったふるさとに貢献したい」、「自分の意思で応援したい自治体を選びたい」といった思いを叶えるために2008年に創設された「ふるさと納税」。今、特産品などの特典も人気となって自治体への寄附が飛躍的に伸びています。本セミナーでは、ふるさと納税のポータルサイト「ふるさとチョイス」を立ち上げ、ふるさと納税ブームを巻き起こした株式会社トラストバンク社長の須永氏をお招きし、起業のきっかけ、地方創生への思い、そして今後の展望や課題について語っていただきます。

参加費：無料（定員80名）・事前申込制
得意な1/20ワークショップ参加として1/10名優先。
2/20名優先は締め切りました。
申し込みは締め切りました。

講師経歴：須永珠代（きながたまよ）
2012年4月にトラストバンクを設立し、同業対抗「ふるさと納税」の「ふるさと納税」を確立して世に広げたいという思いから、ふるさと納税のポータルサイトを立ち上げた。ふるさと納税の「ふるさと納税」を確立して世に広げたいという思いから、ふるさと納税のポータルサイトを立ち上げた。ふるさと納税の「ふるさと納税」を確立して世に広げたいという思いから、ふるさと納税のポータルサイトを立ち上げた。

問い合わせ先：
大阪大学コミュニケーションデザイン・センター
stips@cdsc.osaka-u.ac.jp
http://www.cdsc.osaka-u.ac.jp/

GLCQCLセミナー(138)
「シリーズ：適正技術 Design for Life」第13回 WS

ふるさと納税で 地域を元気に したい

地域活性化の仕掛けとこれから

講師：須永珠代氏
(株式会社トラストバンク 代表取締役社長)

日時：2016年1月21日（木）18:00-20:00
場所：大阪大学豊中キャンパス
豊中総合学館501講義室

「生まれ育ったふるさとに貢献したい」、「自分の意思で応援したい自治体を選びたい」といった思いを叶えるために2008年に創設された「ふるさと納税」。今、特産品などの特典も人気となって自治体への寄附が飛躍的に伸びています。本セミナーでは、ふるさと納税のポータルサイト「ふるさとチョイス」を立ち上げ、ふるさと納税ブームを巻き起こした株式会社トラストバンク社長の須永氏をお招きし、起業のきっかけ、地方創生への思い、そして今後の展望や課題について語っていただきます。

参加費：無料（定員80名）・事前申込制
得意な1/20ワークショップ参加として1/10名優先。
2/20名優先は締め切りました。
申し込みは締め切りました。

講師経歴：須永珠代（きながたまよ）
2012年4月にトラストバンクを設立し、同業対抗「ふるさと納税」の「ふるさと納税」を確立して世に広げたいという思いから、ふるさと納税のポータルサイトを立ち上げた。ふるさと納税の「ふるさと納税」を確立して世に広げたいという思いから、ふるさと納税のポータルサイトを立ち上げた。ふるさと納税の「ふるさと納税」を確立して世に広げたいという思いから、ふるさと納税のポータルサイトを立ち上げた。

問い合わせ先：
大阪大学コミュニケーションデザイン・センター
stips@cdsc.osaka-u.ac.jp
http://www.cdsc.osaka-u.ac.jp/

「シリーズ：適正技術」第14回ワークショップ開催

- タイトル：「地域の魅力発見・発信フィールドワーク in Kutsukiaso」
- ゲスト：朽木麻生区長、西川 唱子（NPO 法人結びめ）
- 日時：2016年2月16日（火）～17日（水）
- 場所：滋賀県高島市朽木麻生地区
- 主催：大阪大学コミュニケーションデザイン・センター（CSCD）
- 共催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

滋賀県高島市朽木麻生地区において、1泊2日のフィールドワーク&デザイン・セッションを行い、地域課題発見とものづくりによる解決案づくりや仕組みづくりのあり方について知見を深めました。

今回のフィールドワークでは、地域の方々とともに、「雪かき」、「マップ」づくり、地域資源の発掘と創造のためのワークショップの活動を通じて、地域の魅力発見・発信にチャレンジしました。

「シリーズ：適正技術」
第14回
Design for Life
地域課題発見とものづくりによる解決案づくり

「シリーズ：適正技術」
地域の魅力発見・発信フィールドワーク in Kutsukiaso

「シリーズ：適正技術 (Design for Life)」では、国内外の社会課題、もついでに、日本人の課題をめぐって「適正技術」について、ワークショップや実践を通じて解決策を探ります。

日時：2016年2月16日(火)～17日(水)
 場所：滋賀県高島市朽木麻生

○今回のフィールドワークの開催
 今回のフィールドワークでは、地域のみなさんとともに、「雪かき」、「マップ」づくり、地域課題の発見とものづくりのワークショップの活動を通じて、地域の魅力発見・発信にチャレンジしていきます。

○参加対象
 大阪大学、大阪大学教職員、その他の大学、一般（定員：15人（参加費：10,000円、参加費一律無料））

○申し込み方法
 2016年2月15日までに申し込みをお願いします。
 担当：1204 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター 西川 唱子
 電話：0749-2792000（内線222） FAX：0749-2792000
 担当：0749-2792000（内線222） FAX：0749-2792000

主催：大阪大学コミュニケーションデザイン・センター(CSCD)
 共催：公共圏における科学技術・教育研究拠点(STiPS)



🍁 共催：トークプログラム「知デリ」

「知デリ」は、大学と社会が連携して、アートや科学技術、文学など、様々な領域で活躍するゲストを迎え、表現や技術について話し合うトークプログラムです。それぞれの専門領域における「知術」（知識と技術）を参加者のみなさんと横断・交換し、新しい発想の創出やアイデアの実現につなげることを目指して企画されたものです。

【共催イベント】知デリ in 梅田 蔦屋書店

- タイトル：シマシマリズム：秩序の裏側 でたらめのほんと
- ゲスト：三輪 眞弘（作曲家／情報科学芸術大学院大学（IAMAS）教授）、近藤 滋（生物学者／大阪大学大学院生命機能研究科 教授）
- 日時：2015年10月3日（土）17:00～19:00
- 場所：梅田 蔦屋書店 4th ラウンジ（大阪市北区梅田3-1-3 ルクア イーレ 9F）
- 主催：大阪大学コミュニケーションデザイン・センター（CSCD）
- 共催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 支援：JST（科学技術振興機構）科学技術コミュニケーション推進事業「ネットワーク形成型」
- 企画制作：CSCD ワーキングメンバー（小林 傳司、神里 達博、木ノ下 智恵子、久保田 テツ、辻田 俊哉）、学生スタッフ（安藤 歴、五十嵐 久人、宍戸 里帆、竹花 藍子、鄭 実香、中嶋 研生、宮内 天士、山本 遊）

数式、辞書の索引、レジ待ちの行列。私たちの周りにはたくさんの「秩序」があふれています。しかし私たちは秩序を求める一方で、時には全く逆の「でたらめ」に強く魅了されることもあります。私たちにとって「秩序」とは、「でたらめ」とは、一体何なのでしょう。

今回の対談では、動物の模様形成にひそむ「秩序」を、チューリングパターンという数理モデルによって見出した生物学者、近藤滋さんと、厳密な規則性に支えられながらも「でたらめ」であるかのような"逆シミュレーション音楽"を制作する作曲家・三輪眞弘さんをお招きし、「秩序」と「でたらめ」の関係や、その魅力に迫ります。（告知文より）



【共催イベント】知デリ in 3331 Arts Chiyoda

- タイトル：モノとコトバの『地』平
- ゲスト：三浦 基（演出家／[地点] 代表）、佐伯 和人（惑星地質学、鉱物学の研究者／大阪大学大学院理学研究科宇宙地球科学専攻 准教授）
- 日時：2015年10月12日（月・祝）18:30～20:30
- 場所：3331 Arts Chiyoda 1F コミュニティスペース（東京都千代田区外神田6丁目11-14）
- 主催：大阪大学コミュニケーションデザイン・センター（CSCD）
- 共催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 支援：JST（科学技術振興機構）科学技術コミュニケーション推進事業「ネットワーク形成型」
- 企画制作：CSCD ワーキングメンバー（小林 傳司、神里 達博、木ノ下 智恵子、久保田 テツ、辻田 俊哉）、学生スタッフ（安藤 歴、五十嵐 久人、宍戸 里帆、竹花 藍子、鄭 実香、中嶋 研生、宮内 天士、山本 遊）

世界はモノとコトバで、できています。

モノがあるからコトバが生成し、コトバがあるからモノが認識できます。

そうやって、モノがコトバを、コトバがモノを産み出すウロボロスの輪は、人類をどこに導くのでしょうか。

今回の「知デリ」では、この究極問題に迫るべく、敢えて全く異なるフィールドを生きる二人に光を当てます。地球の隅々から宇宙の果てに至るまで、「モノ」の世界を究めるべく、日々奮闘する惑星地質学者と、いにしえから現代に至る人間のありようを、「地点語」という独特の「コトバ」に組み替えて表現する、演出家。二人の異才は、加速する近代の果てに何を見ているのでしょうか。

新しい時空間が、今日、この『地』に立ち現れる瞬間にご注目ください。（告知文より）



【共催イベント】知デリ

- タイトル：まなざしの交差点～物理学者と詩人の邂逅
- ゲスト：谷川 俊太郎（詩人）、橋本 幸士（理論物理学者／大阪大学大学院理学研究科 教授）
- 日時：2016年3月27日（日）16:00～18:00
- 場所：アートエリア B1（大阪市北区中之島1-1-1、京阪電車なにわ橋駅地下1F コンコース）
- 主催：大阪大学コミュニケーションデザイン・センター（CSCD）
- 共催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 支援：JST（科学技術振興機構）科学技術コミュニケーション推進事業「ネットワーク形成型」
- 企画制作：CSCD ワーキングメンバー（小林 傳司、神里 達博、木ノ下 智恵子、久保田 テツ、辻田 俊哉）、学生スタッフ（安藤 歴、五十嵐 久人、宍戸 里帆、竹花 藍子、鄭 実香、中嶋 研生、宮内 天士、山本 遊）

「知デリ」は、異なる専門領域のゲストを迎え、「知術」を人々に還元（デリバリー）する対談トークプログラムです。

今回は、超ひも理論の視点から10次元に挑む物理学者・橋本幸士氏と、人々を新たな世界に誘（いざな）う作品を生み出す詩人・谷川俊太郎氏をゲストにお招きします。

それぞれのまなざしの持ち主は、どこに立ち、どんな世界をみているのでしょうか。世界に対する2つのまなざしに迫ります。（告知文より）



🍁 共催：学術政策セミナー

研究者、事務系職員、URA 業務に関心のある方を対象に企画された「学術政策セミナー」（主催：大阪大学大型教育研究プロジェクト支援室）を STiPS が共催しました。

【共催イベント】第1回学術政策セミナー -大学のこれからを考える-

- タイトル：研究経営人財育成にむけて
- 講演者：藤吉 尚之（文部科学省大臣官房人事課 人事企画官）
- 事例紹介：小林 加奈（大阪大学研究推進部産学連携課産学連携企画係）、山下 洋（文部科学省科学技術・学術政策局産業連携・地域支援課 大学技術移転推進室長）
- 日時：2015年7月10日（金）14:30～17:00
- 場所：大阪大学吹田キャンパス テクノアライアンス棟 1F アライアンスホール
- 主催：大阪大学大型教育研究プロジェクト支援室
- 共催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

2015年7月10日、第1回学術政策セミナーが開催されました。今回は、文部科学省大臣官房人事課 人事企画官の藤吉尚之氏をお招きして、「法人化を迎えた時に考えたこと、今、大学の職員の皆さんに期待すること」というタイトルのご講演をいただきました。加えて、大阪大学研究推進部産学連携課産学連携企画係の小林加奈氏による事例紹介「文部科学省の研修生として学んだこと、考えたこと」、また、文部科学省科学技術・学術政策局産業連携・地域支援課 大学技術移転推進室長の山下洋氏による事例紹介「事例紹介の補足として一私が考えていたこと、考えていること一」も行われました。研究経営を各大学で実行していくために、教員、職員、第3の職種と言われるURAが、どのようなマインドで働き、また成長していく必要があるのかを議論しました。

【共催イベント】第2回学術政策セミナー -大学のこれからを考える-

- タイトル：なんのために研究をするのか-社会・学術への貢献
- 話題提供：本多 史朗（公益財団法人トヨタ財団 プログラムオフィサー）、相本 三郎（一般財団法人蛋白質研究奨励会／大阪大学 前理事）
- 日時：2015年11月5日（木）10:00～12:00
- 場所：大阪大学吹田キャンパス テクノアライアンス棟 1F アライアンスホール
- 主催：大阪大学大型教育研究プロジェクト支援室
- 共催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

2015年11月5日、第2回学術政策セミナーが開催されました。今回は、公益財団法人トヨタ財団 プログラムオフィサーの本多史朗氏、そして、大阪大学 前理事でもある一般財団法人蛋白質研究奨励会の相本三郎氏をお招きしました。本多氏からは「助成財団における助成プログラムの策定ー配分からインパクトへー」というタイトルで、また、相本氏からは「一研究者が考える研究の社会とのかかわり」というタイトルでご講演をいただきました。これらの話題提供を受けて、「なんのために研究をするのか-社会・学術への貢献」を参加者のみなさんと考えました。

🍁 その他

【協カイベント】シンポジウム「ソーシャル・イノベーションが拓く未来」

- タイトル：ソーシャル・イノベーションが拓く未来
- 基調講演：Kim Meredith (Executive Director, Stanford PACS)
- 日時：2015年10月18日(日) 13:00～16:30
- 場所：大阪大学豊中キャンパス 基礎工学国際棟 シグマホール
- 主催：大阪大学大学院国際公共政策研究科 (OSIPP) 稲盛財団寄附講座
- 共催：Stanford Center on Philanthropy and Civil Society: Stanford PACS (スタンフォード大学「フィランソロピーと市民社会センター」)
- 協力：大阪大学グローバルコラボレーションセンター、公共圏における科学技術・教育研究拠点 (STiPS)

大阪大学大学院国際公共政策研究科稲盛財団寄附講座が、スタンフォード大学の「フィランソロピーと市民社会センター」(Stanford Center on Philanthropy and Civil Society: PACS)との共催で、「ソーシャル・イノベーションが拓く未来」と題したシンポジウムを開催し、STiPSはこのシンポジウムに協力しました。ソーシャル・イノベーションに関心を持っている実践家、研究者、政府・自治体関係者、学生などが参加することをねらって、このシンポジウムは企画されました。

当日の流れは以下の通りです。

基調講演：

Kim Meredith (Executive Director, Stanford PACS) (同時通訳あり)

パネルディスカッション：

第1部「日本におけるソーシャル・イノベーションの歴史と現状」

モデレーター：井上 英之 (慶應義塾大学 特別招聘准教授/INNO-Lab International 共同代表)

パネリスト：鶴尾 雅隆 (日本ファンドレイジング協会 代表理事)、佐々木 健介 (NPO 法人 ETIC インキュベーション事業部 マネージャー)、工藤 七子 (日本財団ソーシャルイノベーション本部社会的投資推進室)、西村 勇哉 (NPO 法人ミラツク 代表理事)

第2部「ソーシャル・イノベーションプレイヤーの紹介と今後の展望」

モデレーター：星野 俊也 (大阪大学理事・副学長)

パネリスト：奥田 晴久 (パナソニック株式会社ブランドコミュニケーション本部)、松島 由佳 (クロスフィールズ 共同創業者・副代表)、中村 俊裕 (コペルニク 共同創始者兼 CEO、大阪大学大学院国際公共政策研究科 招聘准教授)

🍁 市民参加型事例についての実態調査

2015年度は、今後の本拠点の教育・研究活動の拡充のための基盤情報を整理するため、科学技術政策を含む幅広い公共問題領域（まちづくり、環境等）に関する ELSI や公共的関与に関する市民参加型の政策立案活動を実施している他機関の実態調査を行いました。

具体的には、調査目的に合致すると思われる機関について、文献・ウェブ調査によりリスト化を行い、各機関が提供する機能に着目した類型化とマッピングを行いました。加えて、主要機関におけるビジネスモデルおよびネットワークに関する調査も行いました。また、前述の調査を踏まえて、市民参加型「対話」を実施・支援している組織・団体を維持する要件等の整理を行い、中央政府及び地方自治体レベルで行われている政策形成過程について、特に市民や利害関係者等の声を反映させるシステム（公式・非公式を含む）に着目したモデル化も行いました。

5. 関西ネットワークの発展

5. 関西ネットワークの発展

🍵 ラボカフェ

ラボカフェとは、大阪大学が社会の様々な組織や個人とのコラボレーションを通じて、主題に応じた対話を繰り広げる社会学連携事業です。平日夜を中心に、哲学、アート、サイエンス、減災、医療等、多岐に渡るテーマに基づき、対話、レクチャー、アートイベント等の様々なプログラムを実施しています。

STiPS では、科学技術が社会にとってより良いものとして発展していく条件とは何か？ 各界で活躍するフロントランナーをお招きし、「社会の中のイノベーション」という観点から刺激的な時を共有する「シリーズ：科学技術イノベーション」を昨年度に引き続き、2015年度は3回開催しました。

「シリーズ：科学技術イノベーション」第14回開催

- タイトル：メディアと科学技術～伝えるということ～
- ゲスト：鬼丸 真人（元NHK 科学番組ディレクター/プロデューサー、城西国際大学 非常勤講師）
- カフェマスター：神里 達博（大阪大学 CSCD 特任准教授）
- 日時：2015年7月14日（火）19:00～20:50
- 場所：アートエリア B1（大阪市北区中之島1-1-1、京阪電車なにわ橋駅地下1F コンコース）
- 定員：50名程度（当日先着順・入退場自由）
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

2015年7月14日（火）、CSCDのレクチャー&対話イベント「ラボカフェ」において、STiPSが主催となり「シリーズ：科学技術イノベーション」第14回「メディアと科学技術～伝えるということ～」を開催しました。

ゲストは現在「所さんの目がテン！」（日本テレビ系列）で科学監修を務めておられる、元NHK科学番組ディレクター/プロデューサーの鬼丸真人さん。より良い「メディアと科学技術の関係」について議論を交わしました。



「シリーズ：科学技術イノベーション」第15回開催

- タイトル：疑似科学とイノベーションの間
- ゲスト：伊勢田 哲治（京都大学大学院文学研究科 准教授）
- カフェマスター：神里 達博（大阪大学 CSCD 特任准教授）
- 日時：2015年7月24日（金）19:00～20:50
- 場所：アートエリア B1（大阪市北区中之島1-1-1、京阪電車なにわ橋駅地下1F コンコース）
- 定員：50名程度（当日先着順・入退場自由）
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

CSCD のレクチャー&対話イベント「ラボカフェ」において、STiPS が主催となり「シリーズ：科学技術イノベーション」第15回「疑似科学とイノベーションの間」を開催しました。

ゲストは京都大学大学院文学研究科の伊勢田哲治さん。疑似科学とイノベーションの関係について、お話を伺い議論しました。



「シリーズ：科学技術イノベーション」第16回開催

- タイトル：日本の科学者はどこへ行くのか？
- ゲスト：駒井 章治（奈良先端科学技術大学院大学 准教授）
- カフェマスター：神里 達博（大阪大学 CSCD 客員教授/千葉大学 教授）
- 日時：2015年12月10日（木）19:00～20:50
- 場所：アートエリア B1（大阪市北区中之島1-1-1、京阪電車なにわ橋駅地下1F コンコース）
- 定員：50名程度（当日先着順・入退場自由）
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

2015年12月10日、奈良先端科学技術大学院大学准教授の駒井章治先生をお迎えし、「シリーズ：科学技術イノベーション」第16回を開催しました。「日本の科学者はどこへ行くのか？」という、とても大きなテーマについて、ご自身の幅広い経験に基づく大変面白いお話を聞かせて下さいました。

日本の大学行政においては最近、イノベーションの創出、社会的要請への対応、世界大学ランキングなど、「出口」を見据えた戦略を立案し、それに沿ったアクションを求められることが増えてきています。とは言え、こうして予め出口を決めてしまうことがもたらす利点もある一方で、そればかりが強調されると、科学者が「これが面白い！」「こんな研究がしたい！」といった内発的な動機によって支えられる研究が相対的に縮小してしまうことにつながりかねません。任期付きの雇用が増え、研究資金の獲得や短期的な研究成果の達成に追われるあまり、研究者にとって最も大切な資源であるはずの「時間」も



どんどん減ってきており、自分の本当にしたいと思う研究になかなか腰を据えて集中できない……。



そんな状況のなか、「だから科学者の向かう先は暗い」と落ち込むのではなく、だからこそ科学者は自分たちがどこへ向かいたいのかをしっかりと考え、積極的に行動を起こしていくにはどうすればよいのか。面白いと思う気持ちを共有できる研究者が集まり、グループとして活気を高めて、周りの人をどんどん

巻き込んでいく。そんな新しい研究の形を支える仕組みを作るためにはどうすればよいのか。セミナーの後半では、聴衆の方から挙げた教育や芸術、メディアや政策といった多様な質問に答えながら、この大きな課題について皆で議論しました。

❖ 京大拠点主催：政策のための科学イベント

講演会「Real World Data 時代におけるヘルスケアの方向性」

- タイトル：Real World Data 時代におけるヘルスケアの方向性
- ゲスト：鈴木 康裕（厚生労働省 技術総括審議官）
Mondher Toumi（マルセイユ大学 教授、CEO, Creativ-Ceutral）
池田 俊也（国際医療福祉大学大学院 教授）
- 日時：2015年4月16日（木）13:00～16:00
- 場所：アキバプラザ アキバホール（東京都千代田区神田連堀町3 富士ソフト秋葉原ビル）
- 主催：一般社団法人ヘルスケア・データサイエンス研究所
- 共催：京都大学学際融合教育研究推進センター 政策のための科学ユニット
株式会社日本医療データセンター
- 後援：厚生労働省
国際医薬経済・アウトカム研究学会（ISPOR）日本部会

2015年4月16日（木）に、一般社団法人ヘルスケア・データサイエンス研究所との共催で「Real World Data 時代におけるヘルスケアの方向性」を開催しました。医療・ヘルスケア分野におけるリアルワールドデータに対する社会的要請と期待は益々大きくなっています。リアルワールドデータを用いた科学的アプローチの方向を議論する中で、特に「医療技術評価（ヘルス テクノロジーアセスメント）」に焦点を当てて本講演会を行いました。データベース分析が、HTA をはじめとする政策決定のみならず、「価値（value）」のエビデンス構築にどのような影響を与えるかについて国内外の専門家からの情報提供を基点として、アカデミア、企業関係者による意見交換が行われました。

RHDS春季講演会開催のご案内

「Real World Data時代におけるヘルスケアの方向性」

主催：一般社団法人ヘルスケア・データサイエンス研究所
共催：京都大学学際融合教育研究推進センター 政策のための科学ユニット
株式会社日本医療データセンター
後援：厚生労働省
国際医薬経済・アウトカム研究学会 (ISPOR) 日本部会

医療・ヘルスケア分野におけるリアルワールドデータに対する社会的要請と期待は益々大きくなっています。今回は、リアルワールドデータを用いた科学的アプローチの方向を議論する中で、特に「医療技術評価（ヘルス テクノロジーアセスメント）」に焦点を当ててセッションを開催いたします。ご多忙中ではありますが、どうぞご参加くださいとお願い申し上げます。

開催日 2015年4月16日(木) 13:00～16:00(開場12:30)

会場 アキバホール(アキバプラザ) 東京都千代田区神田連堀町3 富士ソフト秋葉原ビル

講演内容 本講演には同時演説が入ります

基調講演：鈴木康裕先生（厚生労働省技術総括審議官）
「データヘルス：なぜ今必要か、そして政府として乗りこえるべき課題」
国家戦略や状況下で医療にも期待がもたれている。しかし「臨床有用」ではなく、更に経済的負担軽減可能な電子データを生じ、科学的・客観的に先進医療技術の導入を認めさせる。その際、データ利用のコストや安全性をどのようにバランスさせるかが問われているのではないか。

講演1： Mondher Toumi先生（マルセイユ大学教授、CEO,Creativ-Ceutral）
「データベース研究の事例と政策決定に及ぼすインパクト」
データベース分析が、HTAをはじめとする政策決定のみならず、「価値 (value)」のエビデンス構築にどのような影響を及ぼすのかについて、政策立案の観点から実例を示しながら説明する。

講演2： 池田俊也（国際医療福祉大学大学院教授）
「わが国におけるHTAの動向とReal World Dataの活用」
欧米諸国では、薬物療法の有効性評価について費用対効果などのHTA(医療技術評価)を重視し、医療政策の可及可能な決定の基となっている。わが国においてもHTA(医療技術評価)の方向性について検討が進んでいる。今回は、リアルワールドデータなどのリアルワールドデータを用いたHTAの実態と今後の方向性について議論する。

パネルディスカッション 座長：中山教授・佐藤教授
パネリスト：鈴木先生、Toumi先生、池田先生

RHDS Real World Data
ヘルスケア・データサイエンス研究所

講演会「オランダにおけるテクノロジーアセスメントの実情」

- タイトル：オランダにおけるテクノロジーアセスメントの実情
- ゲスト：Jan Staman（ヤン スタマン）（オランダ・ラテナウ研究所 前所長）
- 日時：2015年11月12日（木）13:00～14:00
- 場所：京都大学医学部基礎医学記念講堂
- 主催：京都大学学際融合教育研究推進センター 政策のための科学ユニット

2015年11月12日（木）に、京都大学医学部基礎医学記念講堂にて、講演会を開催しました。今回は、ヤン・スタマン先生をお招きし、「オランダにおけるテクノロジーアセスメントの実情」と題して講演会を開催しました。講演では、全てのオランダの大学では約30年にわたって科学技術と社会（Science technology and society: STS）に関する部門があり、これらの部門はクリティカルな科学技術が公開討論の場で議論されるとともに問題提起され、テクノロジーアセスメントは民主主義と科学技術に関わる重要な理念の一つというお話をいただきました。また、オランダのテクノロジーアセスメントは、ボトムアップ形式、熟議、独立性といった特徴を持っている点、及び、これまでメディアと良好な関係を持ち、政府や大学委員会からも独立性を保っている点が言及されました。講演会では、日本における科学技術と社会に関する国際比較など、活発な議論が、学生や参画教員を交えて行われました。

京都大学学際融合教育研究推進センター政策のための科学ユニット特別講演

オランダにおけるテクノロジーアセスメントの実情

ヤン・スタマン氏 講演会

講演概要：
 全てのオランダの大学では約30年にわたって科学技術と社会（science technology and society: STS）に関する部門を維持しています。これらの部門はクリティカルな科学技術が公開討論の場で議論されるとともに提議されました。テクノロジーアセスメントは民主主義と科学技術に関わる重要な理念の一つと考えます。今日に至るまで、オランダのテクノロジーアセスメントは、ボトムアップ形式、熟議、独立性といった特徴を持っています。これまでメディアとの良好な関係を持ち、政府や大学委員会からも独立性を保っています。その中心となるのがラテナウ研究所です。本講演ではテクノロジーアセスメントの役割、特に議会や政府へのインパクトについて焦点を当てて講演します。さらにテクノロジーアセスメントと委員会や大学研究機関による従来からの科学的助言について比較します。

Jan Staman 1962年から2002年までオランダ農業・自然・食品品質省のいくつも要職を歴任。2002年からラテナウ研究所（www.zethenau.nl）にてテクノロジーアセスメントと科学システムアセスメントのディレクターに就任。現在は科学と社会、政府の限を取り持つ民間のコンサルタント業務に従事。また、「Horizon2020」のR&D政策に関するEU専門家委員会議長を務めている。

2015年11月12日（木曜日）
 参加費無料

会場：京都大学医学部基礎医学記念講堂
 講演：13:00～14:00
 （開場12:30、質疑応答 14:00～14:15）

予約・登録不要です。学生や教員の当日参加も歓迎いたします。

お問い合わせ：京都大学大学院医学研究科薬理皮膚学分野内
 政策のための科学ユニット事務局
 大西 正 先生（075-753-4442）
 TEL：075-753-4442
 主催：京都大学学際融合教育研究推進センター政策のための科学ユニット

研究会「中央省庁からの関西への出向行政官による政策のための科学勉強会」

- タイトル：中央省庁からの関西への出向行政官による政策のための科学勉強会
- 日時：2016年2月4日（火）18:00～19:30
- 場所：京都大学医学部G棟3階 政策のための科学ユニット教室
- 主催：京都大学学際融合教育研究推進センター 政策のための科学ユニット

前年度に引き続き、2016年2月4日（火）に京都大学医学部G棟3階 政策のための科学ユニット教室にて、中央省庁からの関西への出向行政官による政策のための科学勉強会を実施しました。中央省庁から関西へ出向している行政官6名が参加し、京都大学政策のための科学ユニット参画教員との交流会が実施されました。議論の中で、勉強会参加者は、講義の提供を通して、学生との交流を図っていくことが提案され、同時に、今年度講義を経験された先生から学生の積極性が評価できると意見がありました。また、政策における市民生活の位置付けや、科学技術の社会実装について意見交換されました。

6. 国際連携の推進

6. 国際連携の推進

🌟 国際連携

今後より一層教育研究プログラムの内容を拡充させていくためには、科学技術政策研究領域に関する国際的な動向を調査し、さらに海外拠点との連携を強化し、その成果を本拠点独自の教育プログラムに反映させていくことが不可欠です。2015年度には、次の5点の活動を行うことができました。

I) 「責任ある研究・イノベーション (Responsible Research and Innovation; RRI)」に関する国際的ネットワーク機関 (VIRI) への加盟について

近年のEUの科学技術イノベーション政策の柱の一つである「責任ある研究・イノベーション (RRI)」に代表されるように、先進諸国では、科学技術の発展が社会に適切に埋め込まれるために必要な多様なアクターの相互作用のあり方に関する研究の進展が重視されています。こうした問題意識のもと、米国アリゾナ州立大学が「責任ある研究・イノベーション (RRI)」に国際ネットワーク「Virtual Institute of Responsible Innovation (VIRI)」を構築しました。2014年6月、本拠点 STiPS は、審査の上、同国際ネットワーク VIRI に正式に加盟が認められました。2016年3月現在、欧州、アジア、南米、中東などの世界各地から21拠点がVIRIに加盟していますが、日本からは本拠点 STiPS のみが加盟しています (<https://cns.asu.edu/viri/partners>)。

II) 責任ある研究・イノベーション教育・研究推進のためのEUコンソーシアム「Higher Education Institutions & Responsible Research and Innovation; HEIRRI」との連携

EUのHorizon 2020プログラムの助成を受け「責任ある研究・イノベーション (RRI)」の高等教育機関での推進に取り組むコンソーシアムである「Higher Education Institutions & Responsible Research and Innovation; HEIRRI」と、継続的な情報共有・意見交換を行っていくことについて合意しました。

III) 国際的な共同研究について

2015年10月から2016年4月まで、独立行政法人国際交流基金 (The Japan Foundation) ・日本研究フェローシップ (2015年度採択。研究題目「科学技術とイノベーション論の地政学的研究」) によって、科学技術政策を専門とするリヨン第三大学教授アラン＝マルク・リユー (Alain-Marc Rieu) 氏を招聘し、欧州、日本、アメリカ、中国などのイノベーション政策の比較をテーマとした共同研究を実施しました。

IV) スタンフォード大学「フィランソロピーと市民社会センター (PACS)」との意見交換会

2015年10月、スタンフォード大学の「フィランソロピーと市民社会センター」 (Stanford Center on Philanthropy and Civil Society) のエグゼクティブ・ディレクターであるキム・メレディス (Kim Meredith) をお迎えし、小林傳司 (大阪大学 理事・副学長) 等とソーシャルイノベーションに関する教育と研究のあり方について意見校交換を行いました。

V) オランダ・ラテナウ研究所 (Rathenau Institute) との連携強化について

2015 年 11 月オランダ・ラテナウ研究所の前所長であるヤン・スタマン (Jan Staman) 氏を STiPS-Handai 研究会にお迎えし、オランダにおけるテクノロジーアセスメントについての発表をしていただくと共に、スタマン氏を通じてラテナウ研究所との連携強化を行いました。

🍁 海外調査及び発表等

公共的関与に関わる基盤的研究の発展に向け、国際連携の強化を図りました。

具体的な活動としては、2015 年 8 月末から 9 月上旬にかけて、渡邊浩崇 (大阪大学 特任講師) が、米国ワシントン DC にあるジョージ・ワシントン大学国際科学技術政策センター・宇宙政策研究所、ニューヨークにある国連本部、そして、アトランタにあるカーター大統領図書館を訪問し、科学技術政策や宇宙政策に関する研究や教育の米国における現状を調査しました。また、2016 年 2 月下旬から 3 月初旬にかけて、米国ワシントン DC にあるジョージ・ワシントン大学国際科学技術政策センター・宇宙政策研究所を再訪し、加えてオーランドにある NASA ケネディ宇宙センター、カレッジステーションにあるブッシュ大統領図書館、ヒューストンにある NASA ジョンソン宇宙センターを訪問して、米国の宇宙政策に関して継続調査を行いました。

2016 年 3 月には、工藤充 (大阪大学 特任助教) が、バルセロナにある科学館 CosmoCaixa で行われた国際会議「1st Higher Education Institutions & Responsible Research and Innovation Conference: Teaching Responsible Research and Innovation at University」に参加し、STiPS が行う RRI に向けた教育・研究活動の取り組み、成果および今後の課題について研究発表を行い、また、他の参加者との情報交換を行いました。

7. 政策のための科学に関連する活動

7. 政策のための科学に関連する活動（研究業績等）

2015年度の政策のための科学に関連する活動のリストを掲載します。なお、リストアップの方針が大阪大学と京都大学では異なりますので、それぞれの方針を一読した上でご覧ください。

大阪大学

大阪大学の活動リストは、企画運営会議（本冊子 28 ページ参照）構成員の「政策のための科学」に特に関連する活動について掲載いたしました。

著書、論文、寄稿等

- Tadashi Kobayashi. 2016. “Structurewandel des Wissens und die Roller der Universitat”, Bildung durch Integration von Technik und Gesellschaft (Deutsch-Japanische Gesellschaft fur interative Wissenschaft ed.), 135-150 頁, 2016 年 7 月.
- 小林傳司. 2015. 「第 1 部 1 もっと前から学んでおくべきだったこと：3.11 福島原発事故の後で」, 『科学不信の時代を問う：福島原発災害後の科学と社会（島菌進, 後藤弘子, 杉田敦編）（合同出版）』, 2015 年 5 月.
- 小林傳司. 2015. 「社会の中の学問とは-「文系」と「理系」、「理学」と「工学」の区別を超えて」, 『社会と倫理（南山大学社会倫理研究所）』, Vol.30, 2015 年 11 月.
- 平川秀幸. 2016. 「「対話する文化」を掘り起こす仕掛け：阪大サイエンスショップをめぐって」, 『Communication-Design 2005-2015』∞号, 168-179 頁, 2016 年 3 月.
- 神里達博. 2015. 『文明探偵の冒険—今は時代の節目なのか（講談社現代新書）』, 2015 年 4 月.
- 神里達博, 隠岐さや香, 近藤和敬. 2016. 「第 7 章 2 節 食品の安全性」「第 10 章 4 節 確率論的安全性評価」「第 10 章 6 節 放射線リスクの基準値」「第 10 章 10 節 エネルギーをめぐる政策決定」, 『理系のための科学技術者倫理（編者：直江清隆, 盛永審一郎）（丸善出版）』, 2015 年 6 月.
- 神里達博. 2015. 「第 1 章 リスク社会における安全保障と専門知」, 『<シリーズ日本の安全保障> 第 7 巻 技術・環境・エネルギーの連動リスク（編集：鈴木 一人）（岩波書店）』, 2015 年 8 月.
- 神里達博, 隠岐さや香, 近藤和敬. 2016. 『談 no.105 科学を科学する……領域を超えて（水曜社）』, 2016 年 3 月.
- 神里達博. 2016. 「『すごいことが起こる出会い』を求めて」, 『Communication-Design 2005-2015』∞号, 200-211 頁, 2016 年 3 月.
- 神里達博. 2016. 「『STiPS』という挑戦」, 『Communication-Design 2005-2015』∞号, 140-149 頁, 2016 年 3 月.
- 神里達博. 2016. 「情報技術における ELSI の可能性：歴史的背景を中心に」, 『情報管理』, Vol. 58(12), 875-886 頁, 2016 年 3 月.
- 神里達博. 2016. 科学家のテラス「(7)テクノの総本山“AKIHABARA”へ」, 『5: Designing Media Ecology』, Vol.4, 124-125 頁, 2015 年 12 月.

- 神里達博. 2015. 科学家のテラス「(6)ドライ・ラボのグローバル化!?', 『5: Designing Media Ecology』, Vol.4, 117-118 頁, 2015 年 12 月.
- 神里達博. 2015. 「『やんぐす』のこと」, 『群像 (講談社)』, Vol.70(9), 262-263 頁, 2015 年 9 月.
- 神里達博. 2015. 「空の産業革命 ドローン を使いこなせ」, 『ジュニアエラ』 No.77, 6-7 頁, 2015 年 8 月.
- 神里達博. 2015. 「文明探偵」を産んだ街—大阪」, 『本 (講談社)』, Vol.40(6), 32-33 頁, 2015 年 6 月.
- 神里達博. 2015. 科学家のテラス「(5)運命の教授室」, 『5: Designing Media Ecology』, Vol.3, 129 頁, 2015 年 6 月.
- 神里達博. 2015. 科学家のテラス「(4)カミサト君、発想はおもしろいんだけど……」, 『5: Designing Media Ecology』, Vol.3, 122-123 頁, 2015 年 6 月.
- 神里達博. 2015. 「リスクと向き合う: フレーミングと自由」, 『TASC monthly』, No.474, 13-23 頁, 2015 年 6 月.
- 神里達博. 2016. 「(月刊安心新聞) 人工知能と囲碁 技術を支配するのは誰か」, 『朝日新聞』, 3 月 18 日, 朝刊 17 面, 2016 年 3 月.
- 神里達博. 2016. 「(月刊安心新聞) 地震のリスク 予知より「備え」に智恵を」, 『朝日新聞』, 2 月 19 日, 朝刊 17 面, 2016 年 2 月.
- 神里達博. 2016. 「(月刊安心新聞) エネルギー技術 社会を変える文明のテコ」, 『朝日新聞』, 1 月 15 日, 朝刊 17 面, 2016 年 1 月.
- 神里達博. 2016. 「(月刊安心新聞) プロの裏切り プライドと教養の復権を」, 『朝日新聞』, 12 月 18 日, 朝刊 17 面, 2015 年 12 月.
- 神里達博. 2016. 「(未来への発想委員会) メディアのこれから: 上」, 『朝日新聞』, 12 月 2 日, 朝刊 17 面, 2015 年 12 月.
- 神里達博. 2016. 「(月刊安心新聞) パリ同時テロ 冷静さ失わず行方見定めて」, 『朝日新聞』, 11 月 20 日, 朝刊 17 面, 2015 年 11 月.
- 神里達博. 2015. 「(月刊安心新聞) ノーベル賞ラッシュ 「ぬるま湯」時代の成果」, 『朝日新聞』, 10 月 16 日, 朝刊 15 面, 2015 年 10 月.
- 神里達博. 2015. 「(月刊安心新聞) 繰り返す豪雨災害 力づくの治水の限界」, 『朝日新聞』, 9 月 18 日, 朝刊 17 面, 2015 年 9 月.
- 神里達博. 2015. 「(月刊安心新聞) バンコク爆破テロ リスク社会の落とし穴」, 『朝日新聞』, 8 月 21 日, 朝刊 13 面, 2015 年 8 月.
- 神里達博. 2015. 「書評『この世界が消えたあとの科学文明の作り方』」, 『共同通信配信』, 2015 年 8 月.
- 神里達博. 2015. 「(月刊安心新聞) 「宙づりの日々」 災害列島、連帯して備える」, 『朝日新聞』, 7 月 10 日, 朝刊 17 面, 2015 年 7 月.
- 神里達博. 2015. 「(月刊安心新聞) MERS 感染拡大 文明が生んだ不意の一撃」, 『朝日新聞』, 6 月 19 日, 朝刊 17 面, 2015 年 6 月.
- 神里達博. 2015. 「(月刊安心新聞) ドローンの功罪 新技術の管理という難問」, 『朝日新聞』, 5 月 15 日, 朝刊 17 面, 2015 年 5 月.
- 神里達博. 2015. 「(未来への発想委員会) リスク社会を生きる: 上」, 『朝日新聞』, 5 月 8 日, 朝刊 15 面,

2015年5月.

- 神里達博. 2015. 「(月刊安心新聞) 老朽インフラの改修 メリハリある計画のために」, 『朝日新聞』, 4月17日, 朝刊15面, 2015年4月.
- 八木絵香. 2016. 「学会の知を社会で活かすために」, 『日本原子力学会誌』, 57(4), 4-5頁, 2015年4月.
- Naoyuki Mikami, Ekou Yagi. 2015. “Bridging Global-Local Knowledge Gaps in Public Deliberation”, *Governing Biodiversity through Democratic Deliberation* (Edited by Mikko Rask, Richard Worthington) (Routledge), 2015年5月.
- 八木絵香, 本間直樹. 2016. 「対話についての対話 : ネクストステージのために」, 『Communication-Design 2005-2015』∞号, 246-265頁, 2016年3月.
- 西川勝, 本間直樹, 八木絵香. 2016. 「絡み合う人と人の中から生まれる柔らかいイノベーション」, 『Communication-Design 2005-2015』∞号, 236-245頁, 2016年3月.
- 辻田俊哉, 市田秀樹, 津田和俊, 敦賀和外, 中内政貴, 松行輝昌. 2016. 「『適正技術教育』への新たなアプローチに向けて : 『Design for Life—地域が変わるものづくり』プロジェクトを手掛かりに」, 『Communication-Design 2005-2015』∞号, 86-93頁, 2016年3月.
- 辻田俊哉. 「イラン核合意と中東における地域秩序—「機会」と「脅威」をめぐる認識の相違とその含意」, 『国際安全保障』, 43巻3号, 58-70頁, 2015年12月.
- 山内保典. 2015. 「連載サイエンス・フィクション? 第1回『好奇心』」, 『一般財団法人理数教育研究所広報誌 Rimse』, No.12 (2015), 18-20頁.
- 山内保典. 2015. 「連載サイエンス・フィクション? 第2回『百年の計』」, 『一般財団法人理数教育研究所広報誌 Rimse』, No.13 (2015), 18-20頁.
- 山内保典. 2015. 「連載サイエンス・フィクション? 第3回『人と人とのつながり』」, 『一般財団法人理数教育研究所広報誌 Rimse』, No.14 (2015), 18-20頁.
- 山内保典. 2015. 「連載サイエンス・フィクション? 第4回『創造を生む環境』」, 『一般財団法人理数教育研究所広報誌 Rimse』, No.15 (2016), 38-40頁.
- 渡邊浩崇. 2016. 「宇宙政策とコミュニケーション—文理融合に向けて—」, 『Communication-Design 2005-2015』∞号, 94-107頁.
- Hirota Watanabe. 2016. “Japan’s Participation in the U.S. Space Shuttle Program: Achievements and Lessons in Space Policy,” *Osaka University Law Review*, Number 63, pp. 33-52.
- 渡邊浩崇. 2015. 「宇宙状況認識」(27頁), 「北米航空宇宙防衛司令部」(441-442頁), 日本軍縮学会編『軍縮辞典』, 信山社.

社会貢献

- 神里達博. 朝日新聞社「未来への発想委員会(旧ガバナンス懇談会)」委員(継続), 2013年4月~現在.
- 神里達博. 朝日新聞社・客員論説委員, 2014年4月~現在.
- 渡邊浩崇. 国際学術雑誌『宇宙政治 (*Astropolitics: The International Journal of Space Politics & Policy*)』編集委員, 2012年~現在.

アウトリーチ活動等

- 小林傳司. 2015. 招待講演「大学院における教養教育としての高度教養教育という考え方：大阪大学リーディング大学院の取り組み」, 日本学術会議 法学委員会「市民性」涵養のための法学教育システム構築分科会, 2015年5月18日.
- 小林傳司. 2015. 招待講演「科学コミュニケーションの変遷：「科学技術と社会」から「社会の中の科学技術」へ」, 技術同友会, 2015年5月19日.
- Tadashi Kobayashi. 2015. 招待講演“How was people’s voice heard? : A trial of public consultation on energy policy after Fukushima” in Session 3: Society in innovation and creativity, CNRS-EHESS/Fondation France Japon-JST/Ristex Joint WS (Paris) , 135-150 頁, 2015年6月3日.
- 小林傳司. 2015. 招待講演「拡大する科学者の責任：ピアから社会へ」, 大学質保証フォーラム（一橋会館）, 2015年7月27日
- 小林傳司. 2015. 招待講演「依然として解決されていないことども」, 日本学術会議「科学と社会のあり方を再構築する分科会」, 2015年9月11日
- Tadashi Kobayashi. 2015. Keynote speech:invited “National Energy Policy After Fukushima and the Aftermath: Did Deliberative Opinion Poll Work Well?” in Session 3: Society in innovation and creativity, Asia Pacific Science, Technology and Society Network Biennial Conference (Garden Villa, Kaohsiung, Taiwan), 135-150 頁, 2015年10月2日
- 小林傳司. 2015. 招待講演「拡大する科学と社会の相互作用：ピアから社会へ」, サイエンスアゴラ（日本科学未来館）, 2015年11月14日
- 小林傳司. 2016. 招待講演「社会的合意形成, リスクコミュニケーションのあり方」, 電気学会全国大会シンポジウム「社会のための科学技術 ～東日本大震災を契機に考え直す～」, 2016年3月17日
- 平川秀幸. 2015. 大阪大学 CSCD10 周年記念ラウンドテーブル「越境する力（教養）—これからの大学における高度教養教育の可能性と課題」（閉会あいさつ）, 2015年6月3日.
- 神里達博. 2015. パネラー「ICTと社会—ELSI的観点から」, JST/CRDS「科学技術未来戦略ワークショップ『IoTが開く超スマート社会のデザイン』（東京・TKP市ヶ谷カンファレンスセンター）」, 2015年11月
- Yasunari Okabe, Tatsuhiro Kamisato, Ken’ichi Matsumura, Masahide Saito. 2015. ”Risk characteristics and dimension of hazards after the Great East Japan Earthquake”, The 14th European Congress of Psychology (Milan (Italy)) , 2015年7月9日.
- 神里達博. 2015. 招待講演「リスク社会を生き抜く」, 「大阪倶楽部 定例午餐会」, 2015年10月.
- 神里達博. 2015. コメンテーター「社会と歩む再生医療の実現に向けて」, 科学技術社会論学会・第15回年次研究大会(仙台・東北大学), 2015年11月.
- 神里達博. 2015. 話題提供・パネラー「システムとしての技術と社会—技術史的な観点から」, JST/CRDSワークショップ「サービスプラットフォーム：自動走行におけるケーススタディ」(東京・JST), 2015年9月
- 神里達博. 2015. ゲスト・コメンテーター「2030年のエネルギーミックスと温暖化目標／科学技術社会論の観点から」, 環境経済・政策学会設立20周年記念シンポジウム（東京・明治大学）, 2015年5

月

- 神里達博. 2016. インタビュー「動きだす原発 高浜 3、4号再稼働(6) 進まぬ国民・県民理解 中立的議論の場必要 討論型世論調査」, 『福井新聞』1月25日, 朝刊2面, 2016年1月.
- 神里達博. 2015. 会談記録「『住むこと』の行方: 技術民主化時代における専門家の条件(巻頭座談会、特集: 生きるための家 II)」, 『建築雑誌』, Vol. 130(1678), 4-9頁, 2015年12月.
- 神里達博. 2015. インタビュー「高浜原発の再稼働をめぐって」, NHK ニュース『おはよう日本』, 2015年10月16日.
- 神里達博. 2015. 対談「神里達博×萱野稔人《メディアは、ニュースを公正中立に伝えていると思いますか?》『公正中立とは何か?〜ジャーナリズムと行政〜』, J-wave『JAM THE WORLD』, 2015年9月24日.
- 神里達博. 2015. インタビュー「(言葉から考える安保国会) 首相が語るリスクとは 抽象的な説明、わかりにくい論戦」, 『朝日新聞』, 6月14日, 朝刊4面, 2015年6月.
- 神里達博. 2015. インタビュー「[識者談話] 大震災前に回帰/合理性認め妥当=川内原発再稼働差し止め却下」, 『南日本新聞』, 4月23日, 朝刊2面, 2015年4月.
- 八木絵香. 2015. 大阪大学 CSCD10 周年記念ラウンドテーブル「越境する力(教養) —これからの大学における高度教養教育の可能性と課題」(討論者), 2015年6月3日.
- 八木絵香. 2015. ラボカフェ「理系研究の過去・現在・未来 ~理系大学院生と共に考える未来像~」(カフェマスター), 2015年11月25日.
- Toshiya Tsujita. 2016. “The Fourth Wave of Appropriate Technology: Toward an Innovative Approach to Development,” Annual convention for the International Studies Association, Atlanta, Georgia, 2016年3月19日.
- 辻田俊哉. 2015. 「シリーズ: 適正技術」ワークショップ(司会・進行等, 計5回) 2016年2月16日~17日, 2016年1月21日, 2015年11月8日, 2015年7月9日, 2015年6月22日.
- Toshiya Tsujita. 2015. “Rethinking Design Methods for Appropriate Technology: Some Implications for Japan,” International Workshop: Fondation France-Japon de l’EHESS, CNRS, JST/RISTEX, Engaging Society in Innovation and Creativity: Perspectives from Social Sciences and Humanities, Paris, 2015年6月3日.
- 辻田俊哉. 2015. 「イスラエルにおけるサイバーセキュリティ政策—アイアンドームから『サイバードーム』への展開可能性」, 『国際安全保障フォーラム・イン・関西 2015』, 防衛所防衛研究所/大阪大学大学院国際公共政策研究科, 大阪大学中之島センター, 2015年5月30日.
- 山内保典. 2015. 「教室と社会をつなぐ対話」, 大阪教育大学 科学教育センター講演会「科学教育の国際化に向けて」にて講演, 大阪教育大学, 2015年11月25日.
- 山内保典. 2015. 「シンポジウム1《学際連携シンポジウム》領域の創造性」, 日本認知心理学会第13回大会. 東京大学(本郷キャンパス), 2015年7月4日・5日(指定討論)
- 山内保典, 八木絵香. 2015. 「地球環境への取組みの評価におけるフレーミングの影響: 地球温暖化, 持続可能な社会, 新成長戦略フレームの比較」, 『2015年度日本認知科学会第32回大会発表論文集』321-328頁. 千葉大学(西千葉キャンパス), 2015年9月18日-20日(ポスター発表)
- 山内保典, 八木絵香. 2015. 「政策の決め方に関する市民の意向調査: 気候変動関連政策に焦点を当てた

検討], 『科学技術社会論学会第 14 回年次研究大会予稿集』25-26 頁. 東北大学 (川内南キャンパス), 2015 年 11 月 21 日・22 日 (口頭発表)

Mitsuru Kudo, Hideyuki Hirakawa, Ekou Yagi, Tatsuhiko Kamisato, Toshiya Tsujita, Hirotaka Watanabe, Yasunori Yamanouchi, Tadashi Kobayashi. 2016. “Potential and Challenges of Implementing RRI Postgraduate Education: A Case from Japan”, 1st Higher Education Institutions & Responsible Research and Innovation Conference: Teaching Responsible Research and Innovation at University, CosmoCaixa Science Museum, Barcelona, Spain, 2016 年 3 月 18 日.

京都大学

京都大学の活動リストは、参画教員の政策のための科学に関する活動について掲載いたしました。

著書、論文等

- 川上浩司. 2015. 「医療技術評価（世界医学サミット（WHS）京都会合 2015 のトピックス）. 医療レジエンス：医学アカデミアの社会的責任（編集代表・福原俊一）」, 医学書院.
- Shiro Tanaka, Kahori Seto, and Koji Kawakami. 2015. "Pharmacoepidemiology in Japan: medical databases and research achievements. *Journal of Pharmaceutical Health Care and Sciences*", *Journal of Pharmaceutical Health Care and Sciences*, pp.1-16.
- Shiro Tanaka, Sachiko Tanaka, and Koji Kawakami. 2015. "Statistical issues in observational studies in oncology in the era of big data", *Japanese Journal of Clinical Oncology*, Vol.45(4), pp.323-327.
- 川上浩司. 2015. 「今後の臨床研究の方向性-介入研究からデータ研究へ-（川上浩司企画 特集「岐路に立つ臨床研究—新たな品質管理基準の動向—）」, 『化学療法の領域』, Vol.31(8), 92-96 頁.
- 川上浩司. 2015. 「臨床研究の科学的品質の向上に向けて（川上浩司企画 特集「岐路に立つ臨床研究—新たな品質管理基準の動向—）」, 『化学療法の領域』, Vol.31(8), 22-24 頁.
- Osamu Takizawa, Hisashi Urushihara, Shiro Tanaka, Yukiko Doi, Masaru Arai, Toshiyuki Matsunaga, Naomi Ogata, and Koji Kawakami. 2015. "Utilization trends and management and prescription of oral anticancer medicines using nationwide pharmacy databases and a questionnaire survey of community pharmacies in Japan", *International Journal of Pharmacy and Pharmaceutical Research*.
- Nobuyoshi Takabayashi, Kyoko Murata, Shiro Tanaka, and Koji Kawakami. 2015. "Cost-effectiveness of proton pump inhibitor co-therapy in patients taking aspirin for secondary prevention of ischemic stroke", *PharmacoEconomics*, Vol.33, pp.1091-1100.
- Kahori Seto, Junta Yamamichi, Shiro Hinotsu, Koichi Nagata, Yasutoshi Kobayashi, Hisashi Urushihara, and Koji Kawakami. 2015. "Patterns and trends in diagnostic tests use for detection of colorectal cancer after screening with the immunochemical fecal occult blood test in Japan", *Open Journal of Clinical Diagnostics*.
- Akira Sato, E Aramaki, Y Shimamoto, Shiro Tanaka, and Koji Kawakami. 2015. "Blog posting after lung cancer notification: content analysis of blogs written by patients or their families", *JMIR Cancer*.
- Jia Guan, Shiro Tanaka, and Koji Kawakami. 2015. "Anticonvulsants or antidepressants in combination pharmacotherapy for treatment of neuropathic pain in cancer patients: a systematic review and meta-analysis", *Clinical Journal of Pain*.
- Shiro Tanaka, Maki Shinzawa, Hironobu Tokumasu, Kahori Seto, Sachiko Tanaka, and Koji Kawakami. 2015. "Secondhand smoke and incidence of dental caries in deciduous teeth among children in Japan - Results from the Kobe Offspring Study", *British Medical Journal (BMJ)*, Vol.51:h5397.

- Osamu Takizawa, Hisashi Urushihara, Shiro Tanaka, and Koji Kawakami. 2015. "Price difference as a predictor of the selection between brand name and generic statins in Japan", *Health Policy*, Vol.119, pp.612-619.
- Shota Hamada, Hironobu Tokumasu, Akira Sato, Masahiro Iwasaku, and Koji Kawakami. 2015. "Asthma controller medications for children in Japan: analysis of an administrative calaims database", *Global Pediatric Health*.
- Kyoko Murata, Shiro Hinotsu, Shota Hamada, Yasumasa Ezoe, Manabu Muto, and Koji Kawakami. 2015. "The changing patterns of dispensing branded and generic drugs for the treatment of gastroesophageal reflux disease between 2006 and 2011 in Japan: a retrospective cohort study", *BMC Health Service Research*.
- 錦織達人, 川上浩司, 後藤励, 肥田侯矢, 坂井義治. 2015. 「外科領域における Health Technology Assessment」, 『日本外科学会雑誌』, Vol.116(1), 64-69 頁.
- 高橋由光, 瓜生原葉子, 井上真智子, 岡本茂, 柏原英則, 鬼頭久美子, 篠原圭子, 萬代真理恵, 森岡美帆, 田中司朗, 川上浩司, 中山健夫. 2015. 「医療等分野における番号制度導入への医師を対象にした意識調査」, 『Japanese Journal of Public Health (日本公衆衛生雑誌)』.
- Yousuke Onoue, Nobuyuki Kukimoto, Naohisa Sakamoto, Kazuo Misue and Koji Koyamada. 2016. "Visualizing Evaluation Structures using Layered Graph Drawings", *IEEE Computer Graphics and Applications*.
- Yousuke Onoue, Nobuyuki Kukimoto, Naohisa Sakamoto and Koji Koyamada. 2016. "E-Grid: A Visual Analytics System for Evaluation Structures", *Journal of Visualization*.
- Yousuke Onoue, Nobuyuki Kukimoto, Naohisa Sakamoto and Koji Koyamada. 2016. "Minimizing the Number of Edges via Edge Concentration in Dense Layered Graphs", *IEEE Transactions on Visualization and Computer Graphics*, Vol.22(6), pp.1652-1661.
- Kun Zhao, Satoshi Nakada, Naohisa Sakamoto and Koji Koyamada. 2015. "Voting-based Ensemble-averaging Visualization for Water Mass Distribution", *Journal of Visualization*, Vol.18(4), pp.719-731.
- Naohisa Sakamoto and Koji Koyamada. 2015. "KVS: A Simple and Effective Framework for Scientific Visualization", *Journal of Advanced Simulation in Science and Engineering (JASSE)*, Vol.2(1), pp.76-95.
- Kun Zhao, Naohisa Sakamoto and Koji Koyamada. 2015. "Adaptive Fused Visualization for Large-scale Blood Flow Dataset with Particle-based Rendering", *Journal of Visualization*, Vol.18(2), pp.133-145.
- Becker, Carl. 2015. "Back to the Future?", 台湾大學人文社会高等研究院訊.
- カール・ベッカー. 2015. 「愛する者は死なない」, 晃洋書房.
- カール・ベッカー. 2015. 「愛する者をストレスから守る」, 晃洋書房.
- カール・ベッカー. 2015. 「日本的な看取り: その準備, 受容, 意味」, 『京都医学会雑誌』, Vol.61(2), 39-44 頁.
- カール・ベッカー. 2015. 「臨死体験と脳」, 『Mind-Body Science』, Vol.25, 4-7 頁.

- カール・ベッカー. 2015. 「日本人とスピリチュアリティ」, 医学映像教育センター.
- カール・ベッカー. 2016. 「理想的な終焉と仏教の役割」, 『こころのめざめ』, Vol.22, 77-114 頁.
- 沖永 隆子, カール・ベッカー. 2016. 「患者と家族の終末期の意思決定を支えるために」, 『生存科学』, Vol.26(2).
- カール・ベッカー. 2016. 「ケア現場のこころ学創成」, 『こころの未来』, Vol.15, 24-27 頁.
- 富田直秀. 2015. 「生活の質 (QOL) のデザイン」, 『デザイン学論考』, Vol.4, 3-15 頁.
- 富田直秀. 2016. 「物語の可視化: (逐次型弁証法による発見支援)」, 『デザイン学論考』, Vol.6, 53-64 頁.
- Fujimoto S, Kon N, Otaka Y, Yamaguchi T, Nakayama T, Kondo K, Ragert P, Tanaka S. 2016. "Transcranial Direct Current Stimulation Over the Primary and Secondary Somatosensory Cortices Transiently Improves Tactile Spatial Discrimination in Stroke Patients", *Front Neurosci*, Vol.10.
- Hirata A, Hirata T, Takahashi Y, Nakayama T. 2016. "Surveillance rates for hepatocellular carcinoma among patients with cirrhosis, chronic hepatitis B, and chronic hepatitis C based on Japanese claims database", *Hepatol Res.*
- Kohno A, Nik Farid ND, Musa G, Abdul Aziz N, Nakayama T, Dahlui M. 2016. "Factors affecting Japanese retirees' healthcare service utilisation in Malaysia: a qualitative study", *BMJ Open*, Vol.6(3).
- Yumi I, Matsumoto H, Nagasaki T, Kanemitsu Y, Murase K, Ito I, Oguma T, Muro S, Asai K, Tabara Y, Takahashi K, Bessho K, Sekine A, Kosugi S, Yamada R, Nakayama T, Matsuda F, Niimi A, Chin K, Mishima M; Nagahama Study Group. 2016. "Mouth Breathing, another Risk Factor for Asthma: the Nagahama Study", *Allergy*.
- Miyamoto K, Iwakuma M, Nakayama T. 2016. "Experiences and attitudes of residents regarding a community-based genome cohort study in Japan: a population-based, cross-sectional study", *BMC Med Genomics*, Vol.9(1).
- Ukai T, Shikata S, Takeda H, Dawes L, Noguchi Y, Nakayama T, Takemura YC. 2016. "Evidence of surgical outcomes fluctuates over time: results from a cumulative meta-analysis of laparoscopic versus open appendectomy for acute appendicitis", *BMC Gastroenterol*, Vol.16(1).
- Kanatani KT, Hamazaki K, Inadera H, Sugimoto N, Shimizu A, Noma H, Onishi K, Takahashi Y, Itazawa T, Egawa M, Sato K, Go T, Ito I, Kurozawa Y, Konishi I, Adachi Y, Nakayama T. 2016. "Japan Environment & Children's Study Group. Effect of desert dust exposure on allergic symptoms: A natural experiment in Japan", *Ann Allergy Asthma Immunol*, Vol.116(6), pp.425-430.
- Kondo Y, Harada N, Hamasaki A, Kaneko S, Yasuda K, Ogawa E, Harashima S, Yoneda H, Fujita Y, Kitano N, Nakamura Y, Matsuo F, Shinji M, Hinotsu S, Nakayama T, Inagaki N. 2016. "MAIKO Study group. Sitagliptin monotherapy has better effect on insulinogenic index than glimepiride monotherapy in Japanese patients with type 2 diabetes mellitus: a 52-week, multicenter, parallel-group randomized controlled trial", *Diabetol Metab Syndr*, Vol.8(1).

- Chiba Y, Nakayama T. 2016. "Cultural immersion through international experiences among Japanese nurses: Present status, future intentions, and perceived barriers", *Jpn J Nurs Sci*.
- Takahashi Y, Ishizaki T, Nakayama T, Kawachi I. 2016. "Social network analysis of duplicative prescriptions: One-month analysis of medical facilities in Japan", *Health Policy*, Vol.120(3), pp.334-341.
- Ohura T, Tsuyama T, Nakayama T. 2015. "Differences in understanding and subjective effects of home-visit rehabilitation between user families and rehabilitation providers", *J Phys Ther Sci*, Vol.27(12), pp.3837-3841.
- Ohura T, Higashi T, Ishizaki T, Nakayama T. 2016. "Gaps between the subjective needs of older facility residents and how care workers understand them: a pairwise cross-sectional study", *BMC Res Notes*, Vol.9(1).
- Tabara Y, Takahashi Y, Setoh K, Kawaguchi T, Gotoh N, Terao C, Yamada R, Kosugi S, Sekine A, Nakayama T, Matsuda F; Nagahama Study group. 2016. "Synergistic association of elevated serum free fatty acid and glucose levels with large arterial stiffness in a general population: The Nagahama Study", *Metabolism*, Vol.65(1), pp.66-72.
- Kimura H, Fujibayashi S, Otsuki B, Takahashi Y, Nakayama T, Matsuda S. 2016. "Effects of Lumbar Stiffness After Lumbar Fusion Surgery on Activities of Daily Living", *Spine*, Vol.41(8), pp.719-727.
- Yamashita Y, Murayama S, Okada M, Watanabe Y, Kataoka M, Kaji Y, Imamura K, Takehara Y, Hayashi H, Ohno K, Awai K, Hirai T, Kojima K, Sakai S, Matsunaga N, Murakami T, Yoshimitsu K, Gabata T, Matsuzaki K, Tohno E, Kawahara Y, Nakayama T, Monzawa S, Takahashi S. 2016. "The essence of the Japan Radiological Society/Japanese College of Radiology Imaging Guideline", *Jpn J Radiol*, Vol.34(1), pp.43-79.
- Masuyama K, Goto M, Takeno S, Ohta N, Okano M, Kamijo A, Suzuki M, Terada T, Sakurai D, Horiguchi S, Honda K, Matsune S, Yamada T, Sakashita M, Yuta A, Fuchiwaki T, Miyanohara I, Nakayama T, Okamoto Y, Fujieda S. 2016. "Guiding principles of sublingual immunotherapy for allergic rhinitis in Japanese patients", *Auris Nasus Larynx*, Vol.43(1), pp.1-9.
- Aoki T, Inoue M, Nakayama T. 2016. "Development and validation of the Japanese version of Primary Care Assessment Tool", *Fam Prac*, Vol.33(1), pp.112-117.
- Hishikawa T, Date I, Tokunaga K, Tominari S, Nozaki K, Shiokawa Y, Houkin K, Murayama Y, Ishibashi T, Takao H, Kimura T, Nakayama T, Morita A. 2015. "Risk of rupture of unruptured cerebral aneurysms in elderly patients", *Neurology*, Vol.85(21), pp.1879-1885.
- Fujimoto S, Kon N, Takashi N, Otaka Y, Nakayama T. 2015. "Patterns in the collaboration of practitioners and researchers in the use of electrical stimulation to treat stroke patients: a literature review", *J Phys Ther Sci*, Vol.27(9), pp.3003-3005.
- Murase K, Tabara Y, Ito H, Kobayashi M, Takahashi Y, Setoh K, Kawaguchi T, Muro S, Kadotani H, Kosugi S, Sekine A, Yamada R, Nakayama T, Mishima M, Matsuda S, Matsuda F, Chin K. 2015. "Knee Pain and Low Back Pain Additively Disturb Sleep in the General Population: A

- Cross-Sectional Analysis of the Nagahama Study", PLoS One, Vol.10(10).
- Tabara Y, Takahashi Y, Kumagai K, Setoh K, Kawaguchi T, Takahashi M, Muraoka Y, Tsujikawa A, Gotoh N, Terao C, Yamada R, Kosugi S, Sekine A, Yoshimura N, Nakayama T, Matsuda F; Nagahama study group. 2015. "Descriptive epidemiology of spot urine sodium-to-potassium ratio clarified close relationship with blood pressure level: the Nagahama study", J Hypertens, Vol.33(12), pp.2407-2413.
- Ichikawa K, Fujiwara T, Nakayama T. 2015. "Effectiveness of Home Visits in Pregnancy as a Public Health Measure to Improve Birth Outcomes", PLoS One, Vol.10(9).
- Kojima M, Nakayama T, Kawahito Y, Kaneko Y, Kishimoto M, Hirata S, Seto Y, Endo H, Ito H, Kojima T, Nishida K, Matsushita I, Tsutani K, Igarashi A, Kamatani N, Hasegawa M, Miyasaka N, Yamanaka H. 2016. "The process of collecting and evaluating evidences for the development of Guidelines for the management of rheumatoid arthritis, Japan College of Rheumatology 2014: Utilization of GRADE approach", Mod Rheumatol, Vol.26(2), pp.175-179.
- Miyamoto K, Iwakuma M, Nakayama T. 2015. "Residents' awareness and attitudes about an ongoing community-based genome cohort study in Nagahama, Japan", Public Underst Sci, Vol.24(8), pp.957-969.
- Ito H, Kojima M, Nishida K, Matsushita I, Kojima T, Nakayama T, Endo H, Hirata S, Kaneko Y, Kawahito Y, Kishimoto M, Seto Y, Kamatani N, Tsutani K, Igarashi A, Hasegawa M, Miyasaka N, Yamanaka H. 2015. "Postoperative complications in patients with rheumatoid arthritis using a biological agent - A systematic review and meta-analysis", Mod Rheumatol, Vol.25(5), pp.672-678.
- Miyamoto K, Iwakuma M, Nakayama T. 2015. "Social capital and health: implication for health promotion by lay citizens in Japan", Glob Health Promot, Vol.22(4), pp.5-19.
- Kuriyama A, Takahashi Y, Tsujimura Y, Miyazaki K, Satoh T, Ikeda S, Nakayama T. 2015. "Predicting failure to follow-up screened high blood pressure in Japan: a cohort study", J Public Health (Oxf), Vol.37(3), pp.498-505.
- 大寺祥佑, 金沢星慶, 金沢奈津子, 木内隆裕, 中山健夫. 2015. 「ガイドラインの研究・評価用チェックリスト AGREE II による理学療法診療ガイドライン第 1 版の質評価」, 『理学療法学』, Vol.42(7), 596-603 頁.
- 中山健夫. 2016. 「エビデンス診療ギャップとは?」, 『循環器内科』, Vol.79(3), 248-252 頁.
- 中山健夫. 2016. 「民間医療データベースによる疫学研究成果と課題」, 『医療と社会』, Vol.26(1), 37-46 頁.
- 中山健夫. 2016. 「医療・健康のビッグデータの活用に向けてー現状と可能性」, 『臨床栄養』, Vol.128(6), 546-550 頁.
- 真能芙美, 池田香織, 城尾絵里奈, 小栗靖生, 村田由貴, 鬼頭久美, 鈴木望, 太田はる, 中山健夫, 稲垣暢也. 2016. 「糖尿病、脂質異常症、高血圧、肥満症の日米欧ガイドラインにおける食事推奨内容の比較」, 『日本病態栄養学会誌』, Vol.19(1), 99-109 頁.
- 中山健夫. 2016. 「医療ビッグデータ総論」, 『外科』, Vol.78(5), 457-461 頁.

- 中山健夫. 2015. 「臨床研究と出版の倫理「臨床研究登録がなぜ今必要か—新たになったヘルシンキ宣言」」, 『臨床消化器内科』, Vol.30(14), 1717-1723 頁.
- 中山健夫. 2015. 「健康情報学への招待」, 『呼吸と循環』, Vol.63(12), 1183-1190 頁.
- 中山健夫, 杉森裕樹 (監訳). 2015. 「FDA リスク&ベネフィット・コミュニケーション: エビデンスに基づく健康・医療に関する指針」, 丸善出版.
- 中山健夫. 2015. 「京大医学部で教える合理的思考」, 日本経済新聞社.
- 二木史朗. 2015. 「講座 ドラッグデリバリーシステム6 「細胞内・遺伝子デリバリー」」, 『日本防菌防黴学会誌』, Vol.43(5), 259-263 頁.
- Ikuhiko Nakase, Yoshimasa Kawaguchi, Motoyoshi Nomizu, Shiroh Futaki. 2015. "Cellular Uptake of Arginine-Rich Cell-Penetrating Peptides and the Contribution of Membrane-Associated Proteoglycans", Trends Glycosci. Glycotech, Vol.27(155), pp.81-88.
- Ikuhiko Nakase, Shiroh Futaki. 2015. "Combined Treatment with a pH-sensitive Fusogenic Peptide and Cationic Lipids Achieves Enhanced Cytosolic Delivery of Exosomes", Sci. Rep, Vol.5(2015).

社会貢献

- 川上浩司. 内閣官房 健康・医療戦略室 医療情報取扱制度調整ワーキンググループ 委員, 2016年2月～現在).
- 川上浩司. 文部科学省 科学技術・学術審議会臨時委員, 2015年3月～2017年2月.
- 川上浩司. 国立研究開発法人 科学技術振興機構 研究成果展開事業「大学発新産業創出プログラム推進委員会」専門委員, 2015年4月～現在.
- 川上浩司. 国立研究開発法人 日本医療研究開発機構 革新的先端研究開発支援事業インキュベータータイププログラムオフィサー, 2015年4月～現在.
- 川上浩司. 関西国際戦略総合特別区域地域協議会京都市地区協議会委員, 2011年11月～現在.
- 小山田耕二. SIGGRAPH ASIA 2015 Symposium on Visualization in HPC Chair.
- 小山田耕二. 可視化情報学会 会長.
- 小山田耕二. 日本シミュレーション学会 理事.
- 小山田耕二. CAE 懇話会 監事.
- 小山田耕二. 日本工学会 フェロー.
- 小山田耕二. 海洋研究開発機構「先端的融合情報科学研究開発部会」評価・助言委員会 委員.
- 小山田耕二. 日本学術会議 連携会員.
- 小山田耕二. 日本学術会議 総合工学委員会 委員.
- 小山田耕二. 日本学術会議 総合工学委員会 工学基盤における知の統合分科会 幹事.
- 小山田耕二. 日本学術会議 総合工学委員会・機械工学委員会 計算科学シミュレーションと工学設計分科会 計算力学小委員会 委員.
- 小山田耕二. 日本学術会議 総合工学委員会・機械工学委員会合同計算科学シミュレーションと工学設計分科会 ポストペタスケール高性能計算に資する可視化処理小委員会 委員長.
- 富田直秀. 奈良親子レスパイトハウス (東大寺福祉療育病院内), 2009年～現在.
- 富田直秀. ANSHIN デザインプロジェクト, 2014年～現在.

富田直秀. QOL デザインプロジェクト (2016 年～現在) .
富田直秀. 公益財団法人日本股関節研究振興財団 評議委員.
中山健夫. 日本疫学会 理事.
中山健夫. 日本衛生学会 評議員.
中山健夫. 日本公衆衛生学会 評議員, 試験委員, 地方試験委員.
中山健夫. 日本行動医学会 評議員.
中山健夫. 日本子ども健康科学会 理事.
中山健夫. 日本循環器管理研究協議会 評議員, 理事.
中山健夫. 日本禁煙科学会 理事, 編集委員長.
中山健夫. 日本ストレス学会 評議員.
中山健夫. 日本医学教育学会 大学院教育ワーキンググループ委員.
中山健夫. 日本ヘルスコミュニケーション学会 世話人.
中山健夫. 日本神経学会診療ガイドライン統括委員.
中山健夫. 日本消化器病学会診療ガイドライン統括委員.
中山健夫. 日本歯科医学会 歯科診療ガイドラインライブラリー協議会座長.
中山健夫. 日本緩和医療学会 緩和医療ガイドライン委員会補完代替医療ガイドライン改訂 WPG 委員,
診療ガイドライン評価委員 他.
中山健夫. 京都市自殺予防対策連絡協議会委員 座長.
中山健夫. 厚生労働省 e-ヘルスネット情報評価委員会委員 座長.
中山健夫. 京都市民健康づくり推進会議 議長.
中山健夫. 公益財団法人大学基準協会 公衆衛生系専門職大学院認証評価委員.
中山健夫. 独立行政法人日本学術振興会 科学研究費委員会専門委員.
中山健夫. 一般社団法人京都府医師会 産業保健委員会委員.
中山健夫. 一般社団法人ヘルスケア・データサイエンス研究所 (RIHDS) 理事.
中山健夫. 日本インターネット医療協議会 理事.
中山健夫. 医学中央雑誌刊行会 編集委員.
中山健夫. 日本メディカルライター協会 副理事長.
中山健夫. 医療ネットワーク支援センター 理事.
中山健夫. 健康と病いの語りディペックス・ジャパン (DIPEX-JAPAN) 副理事長.
中山健夫. EBH 推進協議会 理事.
中山健夫. 医療ビッグデータコンソーシアム 代表世話人.
御手洗潤. 一般社団法人日本公園緑地協会「屋外広告物安全基準検討委員会」委員.
御手洗潤. 国土交通省都市局都市計画課/公益財団法人都市計画協会「コンパクトシティの実現に向けた
開発許可制度のあり方に関する検討会」 委員.
御手洗潤. 一般財団法人森記念財団「都市づくり制度研究委員会」「地域価値と地域活動の評価手法検討
小委員会」 委員.
御手洗潤. 大阪ビジネスパーク開発協議会・大阪市 「OBP にぎわい創出検討会」 委員.
御手洗潤. 経済産業省地域経済産業グループ地域新産業戦略室コト消費空間づくり研究会 委員.

御手洗潤. 国土交通省都市局公園緑地・景観課 景観・歴史文化環境室／日本屋外広告業団体連合会屋外
広告物適正化推進委員会「審議委員会」 委員.
二木史朗. 日本生化学会理事 (平成 26～29 年度) .

アウトリーチ活動等

- 川上浩司. 2016. 医療や健康のリアルワールドデータの集積と利活用の取組, 東京女子医科大学膠原病リ
ウマチ痛風センター, 2016 年 3 月 24 日.
- 川上浩司. 2016. 医療リアルワールドデータと臨床研究の現状, 京都コモンズ講演, 2016 年 3 月 23 日.
- 川上浩司. 2016. 医療・健康系リアルワールドデータを用いた臨床研究の現状と展望, 生命分子機能研究
会セミナー, 滋賀, 2016 年 3 月 18 日.
- 川上浩司. 2016. リアルワールドエビデンスの潮流, CreativCeuticai-CMIC HTA セミナー, 東京, 2016
年 3 月 17 日.
- 川上浩司. 2016. 臨床研究の基盤整備とリアルワールドデータの活用, 熊本大学生命科学研究部臨床研究
支援センター・病院総合臨床研究部合同シンポジウム, 2016 年 2 月 23 日.
- 川上浩司. 2016. 医療・健康系リアルワールドデータと先制医療、医療の評価. 生命科学フォーラム, 東
京, 2016 年 2 月 8 日.
- 川上浩司. 2016. 自治体のもつ貴重な行政健康資料を可視化して、次世代の政策、産業や健康社会へ役立
てる, 東京都特別区長会, 東京, 2016 年 1 月 15 日.
- 川上浩司. 2015. 薬剤疫学におけるデータベース研究の実例と今後, くすりの適正使用協議会 薬剤疫学
実践セミナー 講演, 横浜, 2015 年 11 月 27 日.
- 川上浩司. 2015. 国内外における医療機器開発の潮流と評価, 第 67 回日本気管食道学会総会特別講演,
福島, 2015 年 11 月 19 日.
- 川上浩司. 2015. 医療データベースの用いたアウトカム研究や市販後安全性評価への活用の展望, 第 21
回日本薬剤疫学会学術集会ランチョンセミナー講演, 大宮, 2015 年 11 月 8 日.
- 川上浩司. 2015. 医療ビッグデータを解析した薬剤評価研究と薬学生への期待, 静岡県立大学薬学部特別
講義, 静岡, 2015 年 10 月 30 日.
- 川上浩司. 2015. 医療機器開発における臨床研究とビッグデータによる評価の展望, 信州大学 AMED 国
産医療機器創出促進基盤整備事業・医療機器開発全般セミナー, 松本, 2015 年 10 月 9 日.
- 川上浩司. 2015. 薬剤疫学と企業戦略, PBA 医薬アカデミーセミナー 講演, 東京, 2015 年 8 月 20 日.
- 川上浩司. 2015. 医療情報の解析の経験を活かして、高齢者情報を用いた解析による健康社会創出へ, 兵
庫県西播磨ブロック老人福祉施設連盟大会講演, 姫路, 2015 年 8 月 3 日.
- 川上浩司. 2015. Medical real world data and clinical research, 第 21 回日本遺伝子治療学会学術集会教
育講演, 大阪, 2015 年 7 月 24 日.
- 川上浩司. 2015. 医学生のキャリアパス : 医療リアルワールドデータと臨床研究, 横浜市立大学医学部特
別講義, 横浜, 2015 年 7 月 08 日.
- 川上浩司. 2015. 医療系リアルワールドデータを用いた新世代の臨床疫学、薬剤疫学研究 : 薬物の安全性
評価、予測にどう切り込むか, 第 42 回日本毒性学会学術年会特別講演, 金沢, 2015 年 6 月 30 日.

- 川上浩司. 2015. 医療系リアルワールドデータを用いた疫学研究の新しい展開, 関西製薬ライセンスング連合 (KPLA) 講演, 大阪, 2015年5月22日.
- 川上浩司. 2015. 医療系リアルワールドデータを用いた研究は、医学や社会をどのように変えていくか, 日本慢性期医療協会役員会講演, 東京, 2015年5月21日.
- 川上浩司. 2015. 医療や薬剤のリアルワールドデータを用いた臨床研究は医学や社会をどのように変えていくか, 安全性評価研究会 2015年春のセミナー 講演, 大阪, 2015年4月18日.
- 小山田耕二. 2015. 科学的可視化による因果関係の探索, NBDC シンポジウム, 2015年10月5日.
- 小山田耕二. 2015. データサイエンスを支える可視化技術, 日本図学会デジタルモデリング研究会, 2015年11月29日.
- 小山田耕二. 2016. ニーズの可視化, 次世代自動車環境・エネルギー循環研究会 第3回特別講演会, 埼玉大学, 2016年3月3日.
- 小山田耕二. 2016. 可視化を利用した因果推論の支援, バーチャルリアリティ技術などを用いた可視化表現法の研究会, 核融合科学研究所, 2016年1月13日.
- 小山田耕二. 2016. データサイエンスを支える可視化技術, ワークショップ「シミュレーション結果を診る技術・魅せる技術 -スーパーコンピューティングにおける可視化技術-」, アクロス福岡, 2016年1月30日.
- カール・ベッカー. 2015. 医療従事者の死生観と日本人の経験智, 天理医療大学定期後援会, 天理医療大学, 2015年5月9日.
- カール・ベッカー. 2015. 日本人の生死観と寺院の存在, 福岡ビハラー定期後援会, 専立寺, 2015年5月23日.
- カール・ベッカー. 2015. 死を意識して人生の意味を考える, NHK文化講座, NHK京都教室, 2015年6月15日.
- カール・ベッカー. 2015. 日本人の経験智で生老病死を見詰め直す, 福岡ビハラー定期後援会, 専立寺, 2015年5月23日.
- カール・ベッカー. 2015. 高齢社会が死期に向かえる, 京都大学公開春秋講義, 2015年5月26日.
- カール・ベッカー. 2015. 生老病死に対する日本人の経験智と自己決定, 連続講演会「京大の知」(「生命・いのち」), 2015年7月4日.
- カール・ベッカー. 2015. 有意義な人生を生きるために, 生と死研究会 上越教育大学 長寿社会のケアを考える～生を支える看護 日本看護診断学会大会, 福井大学, 2015年7月19日.
- カール・ベッカー. 2015. 生老病死に生きる日本人の経験智, 京大の知シリーズ18番, 京都大学品川センター, 2015年7月23日.
- カール・ベッカー. 2015. 研究目標の考え方・絞り方, 政策の為の科学レクチャー, 京都大学人環ホール, 2015年9月3日.
- カール・ベッカー. 2015. 西洋の生命倫理は日本人の死生観に合うのか, 宗教倫理学会講演, キャンパスプラザ京都, 2015年10月3日.
- カール・ベッカー. 2015. 自分らしい理想の最期, 日本尊厳死協会, シルク・ホール京都, 2015年11月1日.

- カール・ベッカー. 2015. 生と死のケア ―日本伝統の知恵に癒しを学ぶ, 第 25 回神経・リハビリテーション研究会, 京都テルサ, 2015 年 11 月 6 日.
- カール・ベッカー. 2015. 京都府教育振興プラン 28 年度改訂について, 京都府教育委員会, 京都ルビノ堀川, 2015 年 11 月 20 日.
- カール・ベッカー. 2015. 日本人の死生観と仏教者の役割, 日蓮宗ビハーラネットワーク, 日蓮宗宗務院, 2015 年 11 月 27 日.
- カール・ベッカー. 2015. 介護からこころを問い直す, 上廣研究報告会, 稲盛記念会館大会議室, 2015 年 12 月 20 日.
- カール・ベッカー. 2016. 日本人の死生観と癒し, 癌患者の会, 兵庫市民会館, 2016 年 1 月 19 日.
- カール・ベッカー. 2016. 看護師の倫理, 武田病院倫理研修, 武田病院, 2016 年 1 月 25 日.
- カール・ベッカー. 2016. 上廣倫理財団の活動と希望 Cross-Currents, ハワイ大学, 2016 年 3 月 18 日.
- カール・ベッカー. 2016. Stress and Environment, Lessons from Japan Buddhist Study Group Moiliili Hongwanji, 2016 年 3 月 19 日.
- 御手洗潤. 2016. まちづくりにおける新たな官民連携『エリアマネジメント』, 中部 PFI/PPP 研究会, 経済産業省 PFI/PPP セミナー, 名古屋, 2016 年 3 月 22 日.
- 御手洗潤. 2016. エリアマネジメントと公園緑地, 札幌市環境局みどりの推進部 札幌市みどりの報告会, 札幌, 2016 年 3 月 14 日.
- 御手洗潤. 2015. 稼ぐエリアマネジメント 公共性と収益, 仙台駅東エリアマネジメント協議会 エリアマネジメントシンポジウム 2015 in 仙台～街を、育てる、力～, 仙台, 2015 年 12 月 15 日.
- 御手洗潤. 2015. ソーシャルイノベーション&エリアマネジメント, 建国大学・京都大学 共同 Workshop, ソウル・建国大学, 2015 年 10 月 16 日.
- 御手洗潤. 2015. 我が国のエリアマネジメントの現状と今後の展望, 梅田地区エリアマネジメント実践連絡会, 2015 年 10 月 14 日.
- 御手洗潤. 2015. パネルディスカッション 全国のエリアマネジメント (取り組みと連携), エリアマネジメントシンポジウム 2015 in 札幌, 札幌, 2015 年 9 月 10 日.
- 御手洗潤. 2015. エリアマネジメント論, 一橋大学国際・公共政策大学院 国土交通論 (第 1 2 回), 一橋大学, 2015 年 6 月 26 日.
- 御手洗潤. 2015. 景観・屋外広告物の近年の展開について, 近畿地方都市美協議会研究会, 近畿地方整備局, 2015 年 5 月 25 日.
- 富田直秀. 2016. 少子高齢社会のまちづくり, ANSHIN のデザインセミナー, 京都大学, 2016 年 3 月 18 日.
- 二木史朗. 2015. アミノ酸・ペプチドは体の調子を整える, ひょうご講座 2015「健康をサイエンスする」, 兵庫県民会館, 2015 年 10 月 6 日.
- 二木史朗. 2015. 細胞の営みを探る, ひょうご講座 2015「健康をサイエンスする」, 兵庫県民会館, 2015 年 9 月 15 日.

大阪大学・京都大学
公共圏における科学技術
活動報告 2015

2016年12月20日発行

編集・発行 公共圏における科学技術・教育研究拠点 (STIPS)
〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-16
TEL 06-6850-6111 (大阪大学代表)
URL <http://stips.jp/>
E-mail stips-staff@cscd.osaka-u.ac.jp



公共圏における
科学技術・教育研究拠点 (STiPS)
Program for Education and Research on
Science and Technology in Public Sphere (STiPS)